

825

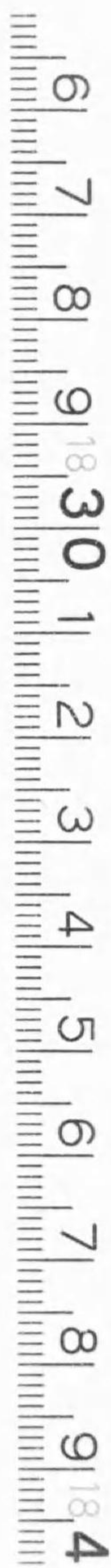
特218

724

年修養社編

日本精神と修養

大阪宏元社書店



始





第218  
724



興作

神精本日

養修と

神精本日

社元宏







# 日本精神と修養 目次

## 立志訓話

古人苦學の精神……………	一
日東青年の意氣……………	六
人生の花……………	一四
實業青年箴……………	二〇
惰氣袖手の戒……………	二六
餘裕心の修養……………	三三
將來の處世觀……………	四〇
今後の讀書觀……………	四九
處世談叢……………	
國民刻下の二大標的……………	一〇九

目次

五





目次

六

貧富と成功……………二七

陰忍の福音……………一六一

地震國民の用意……………一七五

活動と趣味……………一五五

日常生活と處世訣……………二一〇

苦痛の教訓……………二三三

良妻賢母の眞意義……………三三九

先哲の家訓……………三五六

自殺の流行……………三三三

紀元節感話(建國の意義)……………二七

國民内省の秋(上中流者の反省)……………三八

演説の秘訣(説 雜)……………三六

目次終り

# 日本精神と修養

青年修養社編

## 第一章 古人苦學の精神

### 學を爲すの要如何

語を寄す滿天下の青少年諸君、卿等は明治より大正へかけての文運隆盛の大御代に生れ出で、幼にして小學に通ひ、漸く長じて中學に入り、進んでは大學に遊び、或は農工商それらの専門校に入りて、容易く學にいそしむことを得るのであつて、結構

日本精神と修養







至極もない時世に逢遭したものである、而してそれに依りて立身出世の道を開き得て何れも立派なる紳士紳商となり得るのであるが、然し其の割合に現今にては優秀なる人物に乏しく、又家を興し、世を益し國を富ます上に於て、未だ十分の好成績を挙げ得たる人士が比較的少いやうである、之は一體どうしたものであらうか、思ふに學を修め業を習ふの意氣精神に於て、聊か物足らぬ所がある故ではなからうか、否な緊張したる精神、確乎たる信念、徹底したる覺悟といふものが、どうも十分に身に滲み心に徹して居ない爲ではあるまいか、どうか今後の我が國家社會には、學識優れ智徳勝れたる人物を要求することが、一層切實となつて來るのであるから、青少年諸君には其の學窓に讀書講學する期間に於て、十分の決心覺悟を以て、將來の國家社會に於ける有爲、有力、有功の人物たらんことを所期して、只管切磋琢磨せんことを熱望して止まないものである。



### 古人の苦學に學ぶべき點

そこで輓近の事は今暫らく措いて、聊か古人苦學の跡を辿り、其の精神に就て物語ることゝしやう、蓋し古人の苦學といふものは、今日の如く都鄙到る處に學校の設けのあつたものではなく、又圖書館、文庫などいふものゝ備へもなく、従つて良師良友に就いて問ひ學ぶの便宜も少く、天下の青少年にして、學を修め業を習はんとしても、殆ど其の途なきに窮したものである。著者の如き淺學非才の者でも、若し今日ほどの文運隆盛の世に生れ出たならば、今少しくどうかになつて居たであらうにと、往時を追回して今更残念に思ふことが屢々である、身貧家に長じて親の糊口を手傳ひ、中學に通はんには遠き都會へ赴かねばならず、それには學費なく旅費も出さず、空しく幸福なる富家子弟の遊學を羨んだものであつた。之は明治になつてからの事であるか





ら、明治以前なる舊幕時代にあつては、一層修學習業の上に、頗る缺如たるものがある。つたことは、固より論ずるまでもなきことである。

かゝる間に處しても、古人にして家國の爲を思ふ者は、奮發激勵して、或は書を借り友に問ひ、師を求めて非常の苦學を爲し、依つて其の學を大成せんと勉めたものである、而して其の苦學の精神たるや、獨り己が身家を高めん爲のみではなく、實に國家社會有用の人物たらんことを期したものである。加之、其の健氣なる決心覺悟といふものは、各自それの地位身分に安住しつゝも、何れも其の目的を一にして、只管學徳の向上進歩を期待して止まなかつた、これ等の點は、現代青少年の須らく學ぶべき所である。

### 榎林由仙と兒島尙善



極端なる一例話であるが、舊幕時代の外科の名家であつた榎林由仙と、其の弟子兒島尙善との、師弟の關係の如きは、今も昔を偲ぶべき美談を傳へて居る、少しく左に述ぶることゝしやう。

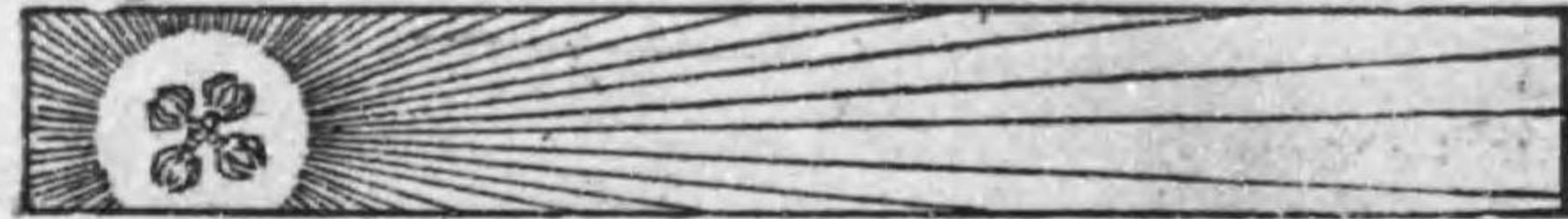
榎林由仙は世に奇行家を以て目せられたほどで、平日其の座上には亡き父の席を設けて、膳を供すること日に三度であり、而して飯も羹も生きたる人の如くに盛り代へて之を薦めた、又味の善悪に就ても、其の子女等と協議して之を作つたから、始めて此の家を訪ふた者などは、此の状態を見て老父存生の事と思ふたといふ、かゝる孝子であつたから、他人の事でも、親の爲としいへば甚く之を憐み劬つた。其の著しき例話は、凡そ彼の家に諸生として來り學ぶ者でも、三年を経ねば、家方を傳ふることを許さなかつた。然るに一日播磨の人兒島尙善といへる者が彼を尋ね來り、己が志願として、三年の所を半年許りに縮めて同學科を修了せんと思ひ、日々に稽古を怠らす





と告げ、三度まで其の事を願ひ出たけれども由仙は固より頑として應じない。そこで尙善は詮方盡きて、終に歸國せんとし、去るに臨みて、「我は老いたる母を養ふべき身であるから、他の門弟子の如く悠々として在京久しきを得ぬのである、ア、仕方がない」と溜息ついたのを、由仙は之を聴くや、忽ち尙善を呼び止め、「予は特別を以て汝の願ひを叶へさせる」といひ早速其の入門を許し、其の束脩の輕かつたのも念とせず、反つて之に倍して多くの物を與へ、日々よく薫陶した。かくて尙善が其の業漸く成りて歸國せんとするや、別れに臨んで、家の秘書をも自ら書寫して與へたのである、然るに尙善は偶々同門の人より砒石を得た、之は外科に有用の物であるから、彼は悦んで携へ來り、それを師に示した、所が其の後由仙は故なくして尙善に破門を言渡したから、尙善は大に驚き、往いて其の由を問ふた所、師は叱して曰ふ、

汝は孝子なりと思ふて甚だ愛したに、砒石を携へたる手をも濯がず、直ちに茶を汲



んで其儘飲んだ、若し不幸にして毒に中つて命を損したならば、母に事ふるに、どの身を以てするのであるか、さる不孝者は、吾が門に居らしめることは出来ないものである。

と、此の道理ある一言に、尙善は其の氣付かざりし粗忽の罪を詫び、辛うじて破門を免されたのであつた。かくて由仙は尙善が其の門を去らんとするに臨み、海陸を渉る船中や馬上の心づかひをも具さに説き聞かせていふ「親を持てる身は、切に慎む所がなくてはならぬぞ」と、懇々と訓誨したのであつた。師弟の情誼實に掬すべきものがある。かくて尙善の苦學も始めて報いられ、師の提擲に由て、後日郷里の良醫となつたといふことである。

以上は孝子苦學の逸話であるが、此の師も此の弟子も、其の志す所が、何れも家國の爲に盡す所あらんと期し、而も人倫道德の最上根源なる孝道に就いて、先づ其の





日本精神と修養 八  
遺憾なきを期したといふ如きは、如何にも奥床しく天晴れなる平生の嗜みといはねばならぬ。思ふに此の細心の用意あつてこそ、萬事に粗漏なきを得て、其の業務上にも遺憾なきを得るのである、どうか今日の青少年諸君も、かゝる心掛と用意とを以て平生萬事に遺漏なきやうに其の心身を律して貰ひたいものである。

### 服部天游の言動

尙ほ極端な例話ではあるが、古人は苦學して其の學殖を豊富ならしめたのみならず多くは自己の天稟、境遇に安んじて、専ら其の人格を完成せんことを勉めた。それが人生に取つて眞の成功を得たものである、今日の如く成功といへば單に金持になること従つて親戚、朋友、隣人、社會を毒しても自家を富裕ならしめさへすればよいといふやうな、利己主義一點張りの淺ましい卑劣根性を有つて居なかつたものである、そ



れに就て大に感ぜらるゝのは、かの舊幕時代の隠れたる篤學者服部天游の言動である。  
天游は一綿服にて、三十年一日の如くに行ひ澄し、弊衣綴るに堪へずして、累々襪襪を爲しても然も平然たるものであつた、それに準じて其の住家も僅かに方丈にして更に他の貯へなく、唯だ書物ある外は、一几、一筆、一硯ありて、塵埃常に座に滿つるも、湛如として自ら足れりとした。而して又世の常の隠者や、不平家の如くに、むやみに酒を飲む事もなく、唯だ讀書することをのみ好み、かくて飽飯の後は北窓の下に偃臥して、架上在る所の巻帙を手任せて繙き、且つ讀み且つ眠つた、而して其の著述する所も亦主として性靈を發揮するを以て自ら娛みとした。又彼は他の褒貶を意とせず、友人門生が訪ひ來れば、悠然として出で迎へ、清談靡々として、終日倦む所がなかつた、而して嘗ていふ、





天の我を遇すること厚しといふべし、そは天我を約するに窮迫ならしめ、嗜欲に淡からしむ。又我を任ずるに疾を以てし、世話に閑ならしむ。故に眼をして宇宙に空しからしめ、膽を以て放言せしむ、自ら快き事亦足り、優游以て歳を卒ふ。唯だ恨むらくは、我を驕らすに才を以てせざることを、されど之によつて、人の爲に役せらるゝを免る。其の意同より厚しといはん、何の恨みあらんや。

と、かくて世を終つたが、其の著述には、立派なる燃犀録、放言、赤裸々等があつて其の赤裸々の一書の如きは、大乘非佛説を平易簡明に編述し、以て世人をして吃驚せしめたものである、誠や此の赤裸々の著述は、かの大阪の隠れたる學者富永仲基の出定後語と共に、一世の視聽を聳動せしめ、後世、平出篤胤をして其の國學の見地より佛教排撃の二大種本たらしめたのである。此等の事は、嘗て拙著なる批判的日本佛教史や、兩部習合辨の兩書に於て、詳しく論述して置いたから、就いて見んことを望む



要するに彼の行動の如きは、必ずしも中庸を得たものでなかつたが、然も其の學者として、己れを挾持するの高潔偉大なりしを概見すべきである。此等の意氣精神は現代青少年の學ぶべき所であらねばならぬ。

### 小山田與清の研學

尙ほ古人の讀書講學に就ては、紹介すべきものが、數へ切れぬほどであるが、特に松屋主人小山田與清の如きも、其の著しき一人である、彼は日夜勉學して倦む所がなかつたから、終に其の學大成して、古今を窮め和漢を通じた、さればかの有名なる水戸の學者にして而も勤王家なりし藤田東湖の如きすら、彼の著なる松屋外集に題して、





古今學者知多少、該博如君有幾人、と、口を極めて稱讚して居る、誠や彼は我が文化文政の交なる徳川文學旺盛の時期に當り、儼然として一方に門戸を高め、平田篤胤、伴信友等と共に、其の名を齊うし、而して村田春海、橋千蔭以後の大家と稱せられたのである。そこで當時四方の名士なる大窪詩佛、太田錦城、藤田東湖、立原翠軒、谷文晁、太田南畝、山東京傳、同京山兄弟の各方面の人々と往來すること頻繁であつて、而して其の門下に遊ぶ者數百人に及び、知名の士も多く其の門より出た、而して又諸侯伯にして教を彼に乞へる者には阿波、對州、平戸の諸藩主より、水戸公の如きすら深く其の名を慕ひ、家臣二名をして其の門に入らしめたのみならず、後には彼をして、史館に出入して、古典を講じ、又詠草をも添削せしめた。而して殊に華頂宮尊超親王は江戸増上寺に留まり給ふて、彼を召して講話せしめ、後には御臣の列に加へ、特に擢んで、大夫の後に從はしめ給

ふた、而して世稱を外記と賜ふたのである。彼が藏書五萬卷なる擁書樓の名は實に一時を風靡したといふ。古人の講學の徒爾ならぬを想ふべきである。

### 伴信友の講學

又、此の與清と並び稱せられたる伴信友が、博聞強記にして、其の著書百貳十部に及び、皇室、神祇、古文、古歌、考證物に至る四百餘卷は、驚くべき精力の結晶といふべく、就中、六國史の朱批が紙面に満ちてゐたといふ如きは、以て其の力學の程を察すべく、而して之が爲に後世を資益せること甚大であつた。されば先年内務省にて同書を其の家に借覽瞻寫せしめたといふは、尤もの次第である。

彼は平生専心一意講學に勉め、常に一室に端座して夜を日に繼ぎ、外出遊覽をさへ避けてゐた、されば一日友人、長澤伴雄が尋ね來り、嵐山行を勧めた所、彼は之に







對へて、

行きて見ぬ人はあらしの山櫻

花と文とはいづれ勝れる

との一首をよんで辭退したといふ。以て彼の好學の程度を想ふべきである、否な彼は花に浮かれるよりも、國粹發揮を以て世に切要なりとしたもので、此の一首以て彼の學者的なる態度を偲ぶべきである、宜べなるかな、晩年彼と交誼を結んだ者は、上下貴賤を通じて、何れも濟々たる多士で、水戸烈公、紀伊一位、白川樂翁、三條實滿、日野資愛、本居太平、藤井高尙、近藤芳樹、足代弘訓、杉田玄白、淺田宗伯、藤田東湖、野々口隆正等に及んでゐる、以て彼の熱烈なる愛國心を敬慕したるものなることを徴せられるのである。古人の講學やまた到れり盡せりといふべきではないか。



### 坪井信道と緒方洪庵

尙ほ幕末に於ける古人研學の苦心談多き中にも、かの鎖國時代に於て、保守的なる漢醫の迫害にも屈せず、蘭學研究より遂に我國醫學の上に、一生面を開いた逸話美談の如きは、最も稱揚すべきものである。而も之は多く人口に膾炙して居るから、之を省略するが、兎に角、杉田玄白や桂川甫周や、大槻玄澤や、宇田川玄隨等の諸名醫の傳記は、實に後人をして奮起せしむる概がある、たとひ其の解體新書や、蘭學事始や、内外選要等の著述が、今日より見て幼稚粗漏なるものとしても、其の苦心と熱誠とは、今人の須らく學ぶべき所でなければならぬ。

之に就いて面白いのは、かの緒方洪庵が、貧書生にして苦學を續け、天保二年に大阪より江戸に遊び、坪井信道の門に入て蘭學を修めた時、彼は嚴冬の日も弊れたる袷





一枚で震へてゐた、それを見て師信道は其の窮を憫み、直ちに己が衣服を脱して彼に與へた所、彼は感泣して之を受け、身に纏ふた。然るに何分にも彼は圖抜けたる長身の男であつたに似ず、師の信道は、人並よりも短身であつたから、其の衣服が彼の膝を露出した。然も彼は之を着て平然として同僚の嗤笑をも念とせず、又衆人の嘲りを顧みず、苦學研鑽の結果、其の學大成して等輩を壓し、七年の後遂に長崎に遊び、蘭人某に就くこと三年にして大阪に歸り、二十九歳にして開業し、遂に一世の名醫となり、西國諸大名の江戸に參觀する者も、途中疾に罹れば、何人を措いても彼に治療を受けたといふ如きは、其の苦心と熱誠とを驚嘆せずには措かれないのである、而して彼の遺したる病學通論、又は虎狼痢治準の如きは、誠に彼の攻學の賜で、其の世益を與へたことの幾許なりしやを、測り知ることを得ないのである。其の立志奮闘の活歴史は、大に後進青年の範とすべきものなるを疑はない。



### 古人苦學の精神を汲め

要するに古人苦學の精神は誠に貴いものである、而して其の國家社會を裨補するの一人物たらんことを念頭に期し、それが爲に堅確なる信念を樹立するに至つたことは實に見上げたものといはねばならぬ。かの後世の人の如く、漫に自己の立身出世を希ふて曲學阿世、以て、一時を糊塗する如きは、正に此等の人を見て愧死すべきものである。希くは後進青年よ、古人學を爲すの精神を汲み取り、而して其の苦學力行の決して尋常一様でなかつたことを看取し、須らく勤勉努力し、更に忍耐久しきに亘りて其の研學攻究を續け、而して智德併せ有するの好紳士とならんことを望んで止まないものである。



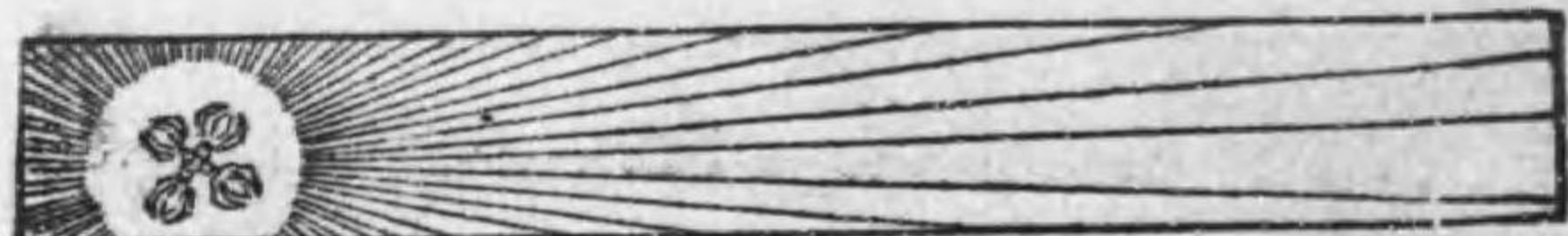


## 第二章 日東青年の意氣

### 人は意氣、事は氣力

人間は氣力が衰へては萬事休するのである、所謂意氣が銷沈をしては、最早生存の意義をも失ふのである。言ひ舊した語ではあるが「剛強なる人と瀑布とは自ら道路を作る」といふ如く、進んで爲すある者は、自然に其の前途が開けて行く、之に反して自卑自屈して、何事も他人に追隨して、其の残り滓を拾ふて居るやうでは、何事にも到底成功する見込はない。

思ふに、先哲の語にも「艱難汝を玉にす」といひ、或は「失敗は成功の基なり」といひ、或は「禍は反つて福を齎らすもの」などあるのは、要するに、人はいつも



氣力を藏して居れ、意氣を銷沈さすな、強い精神を持続して、捲土重来せよと、鞭撻激勵してゐるものに相違ない。よく世諺に「轉んでも只は起きない」といふ如きは即ち此の意味を平易に説示したもので、吾人はどこまでも「獨立心を失ふな」「我あることを忘れるな」と諭したものに他ならぬのである。此のネバリ強き、寧ろ負け惜み的な、自我の勝つた意氣といふものは、人間の處世上には、どうしても必要なものであつて、之がなければ、吾人は生存競争の激甚を加へ、意外の損失、不測の禍害の續出する現代に處しては、逆も自己の生命をすら維持することが出来ないと思ふ。況んや此の間にありて幸運を掴むなどいふことは、到底豫期することを得ないのである。結局、人は意氣を以て立ち、事は氣力に依て成り、而して僅かに此の世の中に生存し得るのである。





### 自尊心、自信力の必要

然らば其の氣力といひ意氣といふものは、如何にすれば常に維持し得られるものであらうか、持續の出来るものであらうか、又或場合には都合よく之を喚起振作せしめ得らるゝものであらうか、思ふに之は自尊心といふものが、いつも吾人の胸奥に藏せられて、他人より見れば、寧ろ自惚とも思はるゝほどの自信といふものがあつて、始めてよく意氣を維持し、氣力を養成し得らるゝのである。彼の世俗に自惚と瘡氣のない者はないといふ如くに、人には誰しも、自ら長所と信じ持みとする所のあるもので假令他人が何といはうとも、何等齒牙に掛るに足らぬ。念頭に置くに當らない、我は我たり、彼は彼たりといふ、自我の勝つた心意氣といふものがある、之は或意味からいへば、自惚心であつて、それに依て、其の特みとする所を固執し、其の長所を維持



して、押進んで行くことが出来るのである。「人毎に一つの癖はあるものよ、我には許せ敷島の道」とよんだ古人は、和歌に依て、其の自惚を満足し擴張せんとしたものであらう、之が即ち自尊心であり自信力である。即ちかの有名な歌人宗祇法師は、其の房々とした長髯を賊の爲に所望せられて之を拒み、「我が爲に髯ばかりは許せかし浮世の塵を掃きすつるまで」とよんだではないか、彼は實に此の強い自信があつて、たとひ一法師の身でも進んで世道人心を啓發指導せんとの大なる心意氣が充實して居たものである。そこに吾人の生命はあり、生存の價値は存するのである、若し此等の自信と抱負とがなかつたならば、彼等は平凡の唯の人であり、犬猫と同じく醉生夢死の人間となつて了つたに相違ない。

### 他に屈せざる意氣精神





一體、人間の生きて行くといふ事は、原始的な欲望の満足のみでは充分でない、若しそれのみで生きて行つて居るものとすれば、其れ等の人は、犬猫と同じ生存をして居るに過ぎない。所が何か一つの事業に生きたい、仕事に光りあらめたいと吾人は大抵望んでゐるのである、即ち古來多少にても世上に論はれ、史上に芳しき名を留めた者は、皆此の希望に生きたと勉めたものであつた。此の希望があればこそ人々は自惚も出来又自信力も生じ、従つて自尊心といふものも其間に成長するのである。かくて始めて必ずしも他人に追隨しない、腰を折らない、頭を下げない、節を屈しないといふ意氣と精神を存じ、又事を成す勇敢の氣力をも生ずるのである。一例を以ていへばかの左甚五郎でも、乃至高山彦九郎でも、他人は何をいはうとも、世間は何と考へて居らうとも、それは自分の關知したことはない、自分は唯だ己が信ずる所を以て、獨立特行して、敢て憚る所なく、而して多少にても國家の爲に貢献し、社會の



爲に寄與する所があれば、それにて予の望みや足れりといふ意氣精神があつたればこそ、彼等の行動となり得たものに相違ない、即ち己れ獨りの利益や幸福や、乃至一般より受くる頼りない果敢ない名聲などを念頭に置くことなくして、己が目的とする所に勇往邁進したればこそ、彼等の朽ちざる眞の名を残し、男らしき行動を遺し得たものに相違ない、こゝが彼等の尊い所であり、而して吾人の學ぶべき所である。

### 情けなき醜汚の現状

所が今日の日本人は、個人主義や利己主義の爲に禍せられたものか、唯だ利那的の享樂や自己欲望の満足のみを逐ふて趨り、此等を充足することのみを一生の目的として居る如き觀がある、之が爲に一面は、金を儲ける事のみを以て人間の能事とし、一面は、色と酒と贅澤を盡すことのみを以て、人生の價値と心得て居る傾がある、而





してそれが爲に、又之を獲る者を以て成功者とし、之を満たした者を以て甲斐性者とし、人間らしいと心得て居る、而して常に國の爲に許し、世の中の爲に謀り、民衆の爲に盡さんとする心意氣の者が至て少い。之は要するに拜金宗に魅せられた結果であつて、従來の教育方針からして誤まつて居ると見なければならぬ、而して之が爲に品性を陶冶する事の必要を了解せず、人格を修養することの切要なるを忘却して居る傾がある、そこで少しく金のある有閑階級は、唯だ自己眼前の欲望を満たすことのみにも尙ほ足らず、それに依りて虚榮虚飾のみ事とし、之を衒ひ之を見せびらかして、心の誇りとしてゐる。誠に淺墓なる振舞であつて、極言すれば犬猫と殆ど同じ所行を爲し、同じ満足を逐ふて居るものといはねばならぬ。恰も犬が噛み合ひをして食を争ひ、勝つて自慢して居るやうなものであり、又サカリがつくと雌犬の尻のみ追つかけて走り廻つて居るのと何等擇ぶ所はない、それすら、強い者がちで、勝犬の



みが欲望を満足せしめて、得々として居ると同一である。之をしも人生の汚漬であり、人間世の墮落なりと見ずして何であらうぞ、吾人は殆ど情けない心地をせずには居られぬのである。

而も世上一般は、此の満足が得られないとて、或者は自暴自棄して、其の極、遂に窮して亂し、或は脅喝をしたり、或は強竊盜を働いたり、或は殺人或は強姦、あらゆる破廉恥の罪惡を犯すとか、然らざる者は自殺をしたり、情死をしたり、或は三角四角の關係を生じて、貴賤貧富を問はず恬として恥づる所なく、アラユル醜劣の所行に出で居るのである。此の如きは層一層情けない現狀であつて、それが東京とか大阪とかいふ繁華な都會ほど一層著しいやうである、要するに輕薄淫靡とが滔々として風を成した結果に外ならぬ。何と惘然なる世相ではないか。





### 古賢の自尊心を汲め

國民よ、須らく少しく心を落付けて、人生を考慮し達觀する所あれ、而して少くも古賢の言動を回想して、各自の自尊心を養ふことを念とせよ、吾人は多くを説明せぬが、古賢は居常、人と生れては、先づ人生の如何なるものなるやを了解せんと勉め而して平生其の着眼點を高處に置き、否な人として當然あるべき場所に其の眼を著け而して全く世の爲め國の爲め、人の爲めに盡さんと期し、それが爲には第一に己が職分とする所を十分に勉め、其の事業をして價値あらしめんと期し、又其の仕事に光彩あらしめんと希ひ、唯だ醉生夢死するを以て最大恥辱なりとし、少くとも我が日本國土に其の生を稟け得たる其身の果報と面目とを汚損せざらんと努力した者である。此の如きは、皆これ自尊心の賜なりと謂ふべきである。



更に願ふに、日本の古賢は、櫻花と富士山とを以て我國の二大象徵とした、而して何れも之を目標として己が行動を律した、即ち世界に獨特なる國體を有する我が日本國民は、此の一事に依りて既に自尊自重する所がなくてはならぬ、即ち居常獨立して其の高きを持つること恰も富嶽の如く、又一朝事しあらば潔よく花々しく散行くこと恰も櫻花の如くでなからねばならぬと自尊自重したものである。かの佐久間象山然り、横井小楠然り、西郷南洲亦然り、その他の義士然り、勇士然り、烈士然り、而してアラユル國士悉く然り志士皆然りといふべき状態であつたではないか、そこに始めて意氣精神の認むべきものがあり、氣力勇氣の自ら發生するあるを自覺しなかつた程である。されば藤田東湖は爲に正氣歌をよんで何と歌つたか、「天地正大の氣、粹然として神州に鍾まる、秀で、は不二の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ、發しては萬葉の櫻となり、衆芳與に儔ひし難し」といつたではないか、これ日本人たるの誇りを暗





示したものである。而して特に櫻を詠じて「みよしのに咲くや櫻は敷島の、やまとの國の光なるらん」とよんだではないか、之は我が大日本帝國の國粹を歌ふたものにならぬ。

又かの紫灘眞木和泉は何と其の志を述べたか、曰く、「碎けるも玉と散る身は潔よし、瓦と共に世にあらんより」と慷慨したではないか、又哲人横井小楠は何と偶作したか、「憂戚知る天の予を玉にせんと欲するを、看來る集義一條の道、窮困を將て其の志を變ぜず、此に到て人間の大丈夫」と、又西郷南洲は常に述懐していふ、「人生元々長からず、此の身豈に其れ輕からんや、利を計らば須らく天下の利を計るべし、名を求めば、應さに萬世の名を求むべし」云々と、更に處世觀を述べていふ、「道を行ふものは、固より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否、身の死生等少しも關係すべからず、事には巧拙あり、物には出来る人、出来



ざる人あるより、自然心を動かすことあれども、人は道を行ふ者なれば、道を踏むにも巧拙はなく、出来ざる人もなし」云々、又詩人梁川犀巖は七十歳に及んで自ら吊ふていふ「老いはてゝ終る命は惜しからじ、世にいさをしのなきぞかなしき」と。以上は、皆これ艱難辛苦を甘しとして、世上の名譽、利害、休戚、災厄の上に超然として立ち、而して國の爲め世の爲め人の爲めに盡さんとする意氣精神を披瀝したものに外ならぬのである。

### 傳ふる道路の酷評

道路傳へていふ我が日本人は、今や意氣銷沈して昔日の氣力なく、明治維新の大業を成就せし意氣は勿論、日清日露兩戰役に現はした氣概の如きも、今や殆ど見るべき痕跡なく、特に關東大震災後は殆ど自暴自棄し、而して自卑自屈の極、内に對しては





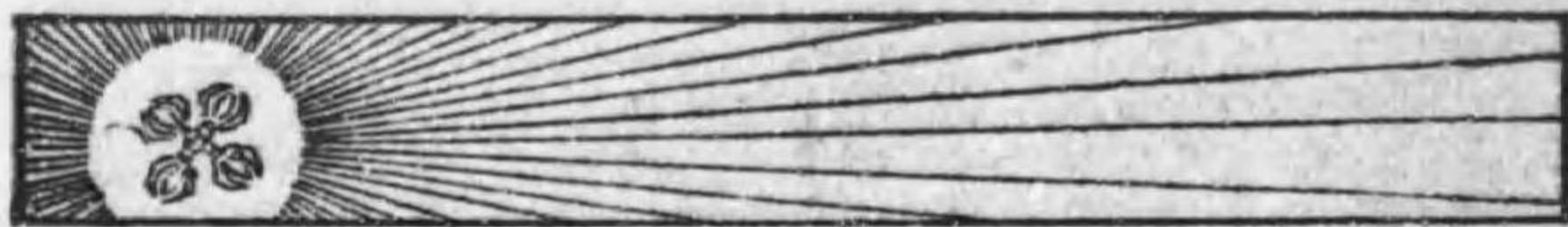
國家を背負ふて立つの國民精神を喪失せんとし、外に對しては退嬰萎縮たゞ屈辱に甘んじて、尙且つ偷安するのみであると、此の如きは、單に外形や表面のみを見るの酷評であらうが、然も現時の我が世相を見渡すと、どうも此の言を過酷なりとして、必ずしも否定すべからざるを覺ゆるのである。

外人がいつも日本の美を稱して、富士山と藝者ガールと人力車との三點を擧げるといふのは、舊い事であるが、成程富士山は依然として昔ながらの富士山で、其の高爽なる極美を發揮して居る。けれども之を國土の象徴とした國民の意氣は今いづくにかあるといひたい。而して他の一なる藝者の如くに、唯だ客の意を迎へて追隨諂諛して多少の黄白を獲んとのみ勉め、而して又他の一なる人力車の如くに、人が人を乗せて其の頤使に甘んじて走る如き、醜汚卑劣の點のみが年と共に我が國民間に彌蔓しつゝあるといふのは、誠に日本國民としての大なる恥辱ではなからうか、今や曠昔の

志士仁人の抱持せし意氣精神は何處にあるか、痛恨の極みといはねばならぬ。

### 日本魂を奈何せん

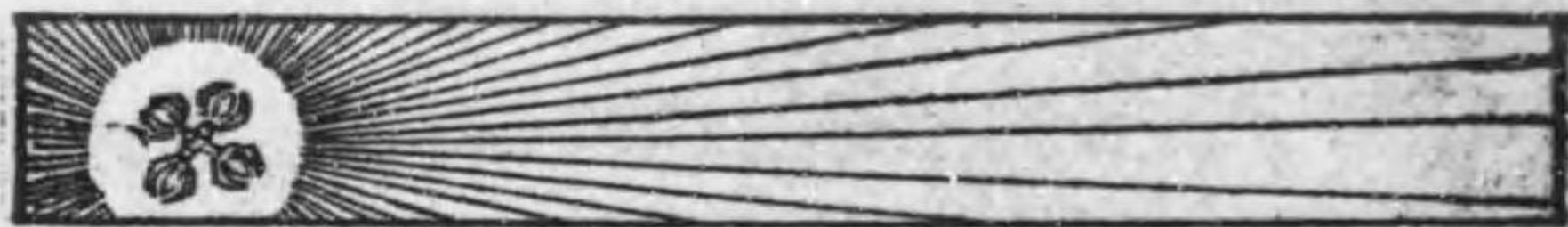
要するに皆これ自尊心を喪失せんとする我が邦人の過誤に基づくといはねばならぬ。而して之がかの震災後の復興難と、世上の不景氣とに原因して居るといふに至つては誠に意氣地なき限りといはねばならぬのである。かゝる時に當り、かの世界戦争の爲に空前の大創痕を被つた獨逸國民が、今や經濟上の危機漸く去れりとして取り、曩には咄嗟の間にヒンデンブルグ元帥を大統領に推戴し、爾後着々として臥薪嘗膽の苦を嘗めつゝ、只管家國の復興を急ぎつゝあるといふに至つては、如何にも彼の國民の意氣精神の強靱なるを認むべきである。即ちかくて彼のネバリ強き國民性は、茲に端なくも、其の基礎を築きつゝあるものといはねばならぬ、而して今や世界の視聽を聳







動せしめて居るのは、如何にも痛快を感じらるゝのである。  
 思ふに古來、剛強なる獨逸民族は、百難撓まず、千苦屈する所なくして、能く邦家を維持した、今や、即ち其の潛勢力を自然に擡頭し來らんとするのであらう、吾人は此等の出來事に對して、唯だ啞然として傍觀的態度を持つることなく、須らく自己の過去を回想して、從來の無反省、無自覺でありしこと、而して又漫に自卑自屈にして甚だしきは自暴自棄に陥らんとしつゝありし過誤を悔ひ改め、猛然と颯起して、現下の態度を改むべきである。然らざれば、古來誇稱の日本魂はどこへ行つたものぞといはねばならぬ、而して終に忠君愛國の專賣的看板を撤回せねばならぬのである。吾人の運命を決するは實に今の秋である、而してそれには先づ全國民が擧つて其の意氣、精神といふものを回復する所がなくてはならぬ。  
 若夫れ我が國民にして尙ほ近時の態度を改むる所がなかつたならば、それは自己自



ら己が運命を咄ふものであつて、全く古來の面目玉を踏み潰すものといはねばならぬ、而して實に祖先數千年の努力を裏切るものといはねばならぬのである、嗚呼日本魂は今何處へ去つたか、我が國民は此の際何を血迷ふて居るか、須らく沈思して自己の胸に手を當て、以て一考再慮すべきことである。而して特に日東帝國の青年男兒にあつては、此の際颯起して國難に當り、國力を回復すること、尙ほ獨逸青年の如くならねばならぬと思はるゝのである。





### 第三章 人生の花 (梅花に似す)

#### 青年と梅花

青年は人生に取りての花である、而して花ならば正に開かんとして開きも初めざる  
苔の如きものである、花而して苔……何と有望有爲にして前途の洋々たるものではな  
いか。

青年は又、花の中での梅でなからねばならぬ、梅は百花に魁けて春を知る、これ  
乍併 嚴冬の苦節に堪へ、霜に侵され雪に壓せられつゝ、幾多の艱苦を凌ぎ來つて其  
の清香を放つ所に床しさが存するのである。烏丸光榮は歌ふていふ、  
霜を経て君が千歳にもほはなん

はつもとゆひの春の梅が枝

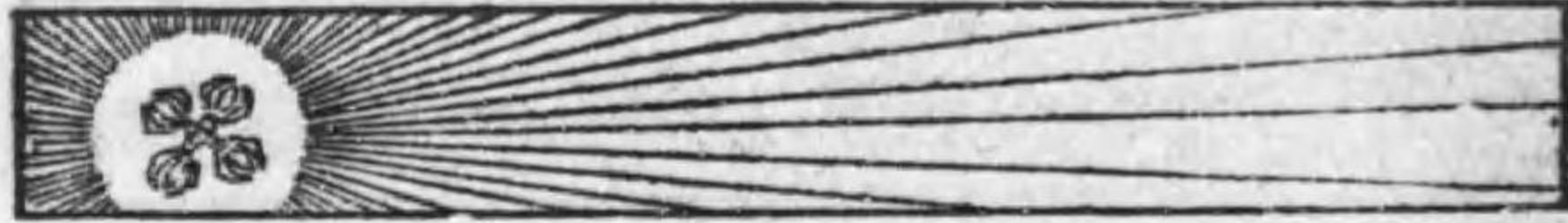
青年は實に初元結の元服を加へた初々しい稚子姿のそれである。而も此の君の潑刺  
たる意氣精神は實に霜の中に早くも香り床しき苔をめぐんでゐる梅花の如きもので  
ある、そこに百難屈せず千艱撓まさる愴あるを認め得る、こゝ即ち青年が梅花の如く  
によく天地に恵まるゝ所以ではないか。

歌人兼氏も亦よんで曰ふ、

咲初むる花はさながら埋もれて

雪のみにほふ梅の下風

と、青年の苦節は實にかく雪に埋もるゝ梅花の如くである、而も既に其の中に前途の  
洋々たるを暗示して、有らゆる寒苦の裡に清香を薫じて居る、されば予輩は嘗て意氣  
を梅花に比して、其の先驅と耐久力とを讃美したことがある、其言に曰く「百花に魁







けて馥郁たる清香を放つ梅花は、實に我が東亞先進國の敢爲なる青年の、正しく學ぶべき態度でなからねばならぬ、而して嚴冬を経て霜雪に屈せず、幹枝疾くも色づき、獨り喧妍の姿を呈する梅樹は、こゝ忍耐持久、臥薪嘗膽の苦を積み、始めてよく國威を發揚し國光を輝耀する日東男兒の國民性でなからねばならぬ」と、嗚呼、今の日本青年は實に内外多事にして、而も國歩艱難の時に際して世に處せんとするのであるが、而も梅花を想ふ時、始めて其の前途の反つて多望なるを祝願すべきではないか。勇め青年、勵め青年、汝は天の試練に逢へる嚴冬の梅花である、其の床しさと頼母しさを、霜雪風雨の間に養成し發揮せねばならぬのである。

### 梅花と國民性

予輩は此の如く青年期の苦節を以て梅花に似した。更に進んで國民性として梅樹を



觀察したい。見よ梅樹の姿勢は老幹槎枿として如何にも武張つて其の堅實味を發揮して居るではないか、かの櫻樹の如き軟脆の趣がない、而して其の花瓣に至つても、頗る執着心に強くして、散り際は汚く見えても、極めて生民に有益なる果實を供給するではないか。實に梅其の物は花あり實ありと稱すべき間然する所なき粘着性の果樹である。思ふに今後の我が國民性としては單に櫻の如き、唯だ外見の燦然たる、散り際の純潔なる態度のみでなく、また此の堅實味と粘着力とを兼有する毅然たる態度でなからねばならぬ。而して最後には大に獲る所ある梅樹の如き素養を要求せずには措けないのである。予輩は花々しいよりも、寧ろ奥床しいのを好む、ナマ優しいよりも堅苦しいのを反つて愛する。蓋し今後の經濟戰爭、國際競争に於て、須らく優勝の地歩を占むべき要ある日本國民は、大に考慮數番を要するからである。それには梅花を取て、國民性の一に加ふべきではないか。





古來、我が國民性は櫻花の如く燦然としてあざやかなる犠牲的精神を發揚した、純潔なる思想、感情、態度といふものは、蓋し此の國民性中より空湧したものである。乃ち公戦に勇に義理に厚く、而して忠烈無比の丈夫を續出したのは之が爲である。然も今後の國民性としては、此の櫻に加ふるに梅を以てせねばならぬではないか、堅實味、耐久力、粘着力、皆これ今日以後、列國對峙の舞臺に立ちて必要缺くべからざる要素であらねばならぬ、蓋し日東に並びて咲き誇る梅と櫻は何とよい取合せではないか。恰も古武士の精神に、現代紳士の知識を以てする如きものである。かくて始めて我が日本は常磐堅磐に榮へ行く基礎を据ゑ得べしと信するものである。

### 史上の梅花讚美

多くの人は櫻花をのみ讚美するが、我が國民は古代にありては、梅をも禮讚したも



のである、遠き古へなる應神の朝に來歸した百濟の博士王仁は、人口に膾炙する、かの有名なる、

難波津に咲くや此の花冬籠り

今を春べと咲くや此の花

の歌を遺した。之は言ふまでもなく、當時の帝都たる難波朝の盛事を祝福したもので爾來幾百年間、我國は細戈千足國の勇名によつて、よく極東の覇權を握り、今の朝鮮半島は言ふまでもなく、遠く滿洲、鞏、肅慎の沿海州までも懼伏し歸服せしめた。されば此の間の國家の象徴としては夙に梅花を擬し、奈良朝聖武帝の天平十年七月には、天皇親しく殿前の梅樹を指し給ひ、諸才子に勅して宣はく、「朕は去春より此の樹を翫ばんと欲した、而も未だ賞翫するまでに及ばない、宜しく今日、各人をして此の梅樹を詠せしめよ」と、此に於て文人三十餘名皆春意を賦したのであつた。





思ふに此の事實は、梅花の我が國民性を夙に代表せるを暗示したものである。蓋し奈良朝は實に我が王朝の盛時であつて、文物燦然として見るべく、而も支那の文明印度の文明、皆一時に我に傳はり來つて、渾然として一渦鏝の中に陶冶せられた時代である、此の間にあつて、我が國民が、乃ち梅花の堅實にして耐久力、粘着力に富める國民性を發揮せんと期したことは、正に疑ひなき所であらねばならぬ。而して之が爲に聖武皇帝の親しく梅花禮讚ありしは、豈に偶然であらうぞ、其の因て來る所や蓋し遠遠にして意味深長を偲ばるゝのである。

### 梅花の愛惜と偉人達士

若夫れ梅花の奥床しさに至つては、古來多くの人を魅して止まない。偉人も達士も之が爲には愛惜の情を寄せた、かの菅公の「東風吹かば」の詠、或は西行の留來加之



の梅、さては紀ノ貫之の娘の鶯宿梅の歌といふ如き、是等は餘りに人口に膾炙して此に紹介するの要なき程である、而も其の詠其ものは、今も人情の極致を語つて、人をして反省し回顧せしめる、即ち平素疎遠な知人朋友も、時には梅花を想ひ出して我が閑居を訪へと諷し、或は毎年、尋ね來れる鶯が其の知己を失つては如何に憂悶するであらうかと、梅花に寄せて人の情緒をそより、かくて舊主を忘れぬ報恩的情操を物語る處に、吾人平生の疎虞を教戒してゐるではないか。梅花に似する青年は、毅然たる一面に於て此のやさしき半面を保有してゐる必要がある。

### 梅花の賞翫と文人墨客

又、此の愛すべく慕ふべき梅花の盛りは、所謂文人墨客をして常に騷然たらしめた而して遠きは和月夕潮、江戸に近き所では蒲田、杉田、かくて梅の名所は到る處に





散見せらるゝに至つた、名所ならぬまでも、山を負ひ川に沿ふた處、所謂隠士の幽棲に貴紳の別墅に、此の風雅の花樹は植ゑられた。又或は手狭き庭園の垣根の一隅にも梅をあしらうて行人の思想を唆らしめた。

梅が香や乞食の家ものぞかるゝ

梅が香にのつと日の出る山路かな

樂々と梅も伸びたる田舎かな

春もやゝ景色とゞのふ月と梅

兄といふ名にはかしこし梅の花

心あらばとはましものを梅が香に

誰が里よりか匂ひきつらん

吹きくれば香をなつかしみ梅の花

ちらさぬほどの春風もかな

吟じ來り誦じ去れば、餘音の響々として盡くことを知らないものを覺ゆる。人生の花なる青年にも此の床しさと、なつかしさがあつて欲しいものである。

### 明治天皇の御製と梅花

畏くも明治大帝は此の梅花に對して、見逃し給はなかつた。而も稀世の歌聖にまします所より、凡人のよみ得ざる趣を捉へて、優しくも心寛き情緒を歌はせ給ふた。

### 梅花盛

こまなべてゆく人おほしたが里の







日本精神と修養

梅のさかりになりやしつらむ

翫 梅

たちよりて折らむと思ふ庭の面の

うめの木すゑに鶯の鳴く

四四

梅 香 薰 袖

春風のさそふ思ひし梅が香の

うれしく袖にとまりけるかな

此の民衆的にして而も同情的なる歌什は、いつまでも、どこまでも我國今後の國民が日夕其の精神を修養すべき修身處世上の金科玉條として座右に備ふべきものである。



梅の實用的價值

尙ほ此の梅が年々歳々此の世に残し行く果實こそは、其の花瓣の美なると共に、其の効用を廣大ならしめて居る。漢醫の古く傳ふる處に依つて「梅は脾肺二經なる血分の藥である、即ちよく肺氣を收めて燥咳を治する、それは肺の收めんと欲するや、急に酸を食して之を收むるのが其の證である。尙ほ傷寒煩熱を治し、渴を止め、痰を去り、瘧瘴を治し、冷熱病を除き、虚勞骨蒸を治し、酒毒を消し、反胃噎膈をも止める」といつて居る、殆ど萬病藥である。又古人の食療法に曰く「梅醬は、しつきを去り、かはきを止め、くだり腹、たんによし、霍亂、下血、しらち、ながちによし、又諸毒を消す」と、其の効能の著しきを示してゐる。思ふに古來我が武人行客が、山行野遊に、此の梅干を握り飯の上に添へ、必ず之を携帯したのは、必ずしも簡易生活

日本精神と修養

四五





の表現のみではない。其の効能が諸毒を消すに著大であつたからである。今も流行傳染の疫病に對して之が効能の顯著を認めて居るではないか。

我國今後の青年は、其の國民性として一方に櫻を採ると共に、他方に梅を用ひて欲しい、而して堅韌耐忍の素質を養ふと共に。香ばしき譽れを郷黨の間に高め、而して人生の花の終りとしての果實を結ぶや、其の効驗の大なるを、此の梅實の如くなつて欲しいものである。若し能く此の素質にして備はり、此の修養にして積まるゝならば現下、歐米より襲來せる思想の競争にも勝利を占め得て、其の悪化を撃退し、彼我の長所を調和して、渾化せる美點を發揮し、始めてよく邦家人文の進歩の爲に天下に貢獻寄與する所が少からぬと思ふのである。かゝる收穫はまた梅の實のその如くでなからねばならぬ。

人生の花なる青年も、幾星霜を閲して老熟の境に入り、次代青年に其の地位を譲る



のであるが、而も其の時には、所謂効能タツブリなる梅干親爺となつて、尙ほ世に譽れを残して貰はねばならぬ。

## 第四章 實業青年箴

### 農村青年の早急病

近來は文化が進んだ爲といはうか、どうも人の心が、汽車や電車や自動車の如くに忙がしく飛び上り、又飛行機のやうに全く上の空である、都會のせまこましい、生存競争を眼前に目まぐるしく毎日眺め通して居る商人、思はずも時勢に引づられ、爲に早急病に罹るのは、周囲の事情からいつて詮もなき所であるが、之に反し渺茫とした





廣き天地自然を相手として田園に生活し、氣長く春秋の收穫を心掛けて居る農村などで、其の青年の心が矢張り、時代かぶれをして兎角早急に成り勝ちなのは、如何にも應はしからぬことである。何も田舎は自轉車が唯一の交通機關であるからとて、之に飛び乗つて用事を便するから、之に準じて氣質までも早急にするには當らない。矢張り五穀蔬菜や果實の成熟を日々の手本として、農家は農家らしく其の青年も氣長に悠然として然るべきものである。

一體、少壯の者には勇氣もあり霸氣も富み、臂力もウンとある者である、然し彼等には老成人のやうに未だ沈着といふ修養が積んでゐない。従つて思慮も多くは淺薄である、そこで彼等青年も現代は兎角早急病に罹つて、何事をも一氣呵成にやり遂げやうとする、勿論時々はこの一氣呵成で幸運を握ることもあるが、それは所謂千三つで常例とすることは出来ぬ、されば農家の早急病などはどう見ても譽めた事ではない。

所で今も昔も青少年には此の傾向のあるものと見え、此等に關する古訓も残つてゐる。

### 眞の良農

九州の篤志家正司南畝翁は、嘗て「農業と魯鈍」の一言を以て、此等訓戒を農家青年に下されて居る、其の言に曰く、  
 壯年にて能く働いても、熟地と成し登るに於ては、老人の手緩き者には及ばず、耕耘は氣早き者は下手なり、魯鈍なる者は上手と心得べし、年老いざれば、其の氣と業と相應せざるゆゑ、六十以上にならざれば、眞の良農とはいふべからず、太平の宿習といふものか漸次氣質短くなり、かくすれば手早く、かくなせば手間入らずと、骨折少くして穀物を多く取らんと致せども、草木菜蔬ほど正直なるものはなし。







耕作は第一、早業といふ事を決して致さず、古來の通り、老人の所業に従ひ改むべからず、壯年の者は、血氣に任せて手早き事のみ致せば、田園も漸々荒るゝものなり、走る馬も迂る牛も其の止まる所は易らずとおもひ、日月の運行の如く、氣長く毎日怠らず、緩々と勉むべし。

と、如何にも實際的で、適切の訓戒といふべきである。思ふに今日には、少壯者は兎角骨惜みをして、樂をして金をうまく儲けたい杯と、中々不埒千萬なる心掛を抱いて居るやうであるが、不景氣の世の中となつては、逆もそれは木に縁て魚を求むるよりも無理な注文である。特に農村などにあつては、そんな考は不適用であつて、到底及びも付かない夢想なりと知らねばならぬ。

### 長者小兒の古訓



之に就て太田錦城先生は、嘗て面白い考證をして、後進を訓戒されて居る、それは長者と小兒といふ語源に就いての説明である、曰く、

漢の時に、篤實なる人を長者と呼びたり、おとなしき好き人といふことにて、此の名義極めて妙なり、人の忿争を好んで喧嘩口論するは、小兒のいさかひの習ひの變ぜざるなり、凡百の器玩を好むは、小兒のもて遊びの習ひの變ぜざるなり、醉狂して躁ぎ舞ふも、小兒の躍りはねたる習ひの變ぜざるなり、無用の費へを爲し、人に物を與ふるには、鄙吝なる類、皆小兒の心なり、勝氣の張りたるも小兒の心なり、されば長者とは小兒に對する言にて、おとなしく小兒心のなき人なり、上方にては今に童部しき心ある人なりといふことを言ひ傳ふ、聖人君子には程遠し、學者小兒を免れて長者となり給へ。

成程味ふて見ると、中々奇警にして面白い、否な事實之であつたに相違ない、即ち小





兒の頑是ないヤンチャが年と共に老熟しておとなしくなつたのがオトナ大人に相違ない、さて之を今日に徴するに、ヤレ學者じや政治家じやと大きな面をして居る人でも家庭内では時々ヤンチャを起して、妻君に當り散したり、器物を投げ飛ばして見たりして、怒氣を抜かんとする向も往々見受けるが、是等は即ち小兒心の抜け去らぬものであつて、未だ長者なりといふことを得ない。否な長者どころではない、全く短氣者で。悪くいへば、狂者に類してゐる、されば農村青年などは特に我儘と短氣と一攫千金を夢みて居ては、一日も安閑として田舎に安住してゐらるゝものではない。之は鉦城先生の教へのやうに、長者の心持になるがよい、そして南畝翁も教訓の如くに、平素魯鈍を旨として、眞の良農となることを心掛くべきことである。

### 工人の知足観



次に南畝翁は又、工人の知足を説いて、職工労働者を戒めて居られる。其の一節に面白い言がある。曰く、  
 或大工問ひけるは、世間を観るに、商人は身體を勞せずして金持つ者多し、我等は片時も安座せず働いても、一生貧乏せるは、淺ましき職業なり、故に是より商賈を致さんと思へり、此事如何ならんや、予論して曰く、「月を繪く者は、其の明を繪くこと能はず、花を繪く者は其の馨を繪くこと能はず、人を繪く者は、其の情を繪くこと能はず」と鶴林玉露といふ書に見えたり、人銘々自職の情を知れども、他の職の情は知ること能はず、人に使はるゝ者は、體は勞すれども、心は勞せず、故に夜は熟睡すれども、人を使ふ者は、心を勞するが故に夜も安々眠り得ず。  
 或市中に鍛冶屋あり、親子毎日出精せしに、其の子父に向ひ、我々は如何なる職業ぞや、一日も暇といふ事なく働けども、擔石の儲けなく、世を送れるに、隣の商人





は夏は團扇を把り、冬は火鉢を取つて常に座し、安樂の身なりといへば、父笑ふて汝は、幼少なるゆゑ、未だ知らず。彼の家は我が一代の中に、最早三度主人は易れり、我が家は、是まで五代人手に渡さず、日々働くゆゑ、食事を旨んじ、夜は熟睡す。

以上の文中の、鶴林玉露の語も頗る面白いが、鍛冶屋の親爺の知足観は一層面白い。何のかのといつて、人生は苦あつて樂あり、樂あつて苦あり、働いた後は飲食もうまく、散財した後はアト腹がいたむ、之は天下の御常法だ、どうせ一度人界に生れ来てさて生きて居るのであつて、働くべき手足を有し、使ふべき頭腦を有つて来たのであるから、各自己が職分に安んじて、勤勞して熟睡して病なくして吞氣に暮して行くに限ることである。何も非道にして苦んで、蒼い顔をして人に憎まれて、結局金の番人をして、それで何が幸福であらう、そこをよく考へなくてはならぬ。

### 富を求めし逸話

今一つ茲に面白い逸話がある、昔し或田舎者が都會に出で、運よく富豪となつた。所が郷里に親しき一友人があつて、其の者はかの富豪と同年同日の生れであるに拘はらず、自分は相變らず貧乏である、これは何か金持になる秘傳があるに相違ないとて其の友人は、一日思ひ立つて都會へ上り、同郷出身の友なる富豪の家を訪ふた。時しも冬の事とて、日も短くて暮近くなつた訪問に、富豪の家では手代慇懃に迎へて座敷に請じ、ソレ火鉢よ、ソレ行燈よと種々待遇したが、特別の優待ぶりにや、火鉢にはカン／＼と火は煽つてゐる、行燈には燈心の一把も燃へてゐる、ハハア羨ましい生活をして居るなと思ふ所へ、主人やがて罷り出で、さて／＼之はよくこそその御來訪と挨拶して、舊情を温め懇談を續けたが、其の砌り友人いへらく、







我等はどうしたものか、年既に老いても、今尚ほ貧苦骨を刺すが如くで御座る、此の疾苦を助からん爲に、貴殿の智恵を借りに來たのであります。

と、主人聴きも終らず答へていふ、  
吾子と我とは同年同日の生れであれば、年の吉凶禍福によらぬ事は判つてゐる、唯だ金は之を求むる法を勤めると否との差に因て、貧乏にもなれば金持にもなるのであります。其の求むる法といふのは、先づ恕の一字を守つて、人の家も我家も同じやうに隔てなく思ひやるのを恕といひませう、聖人の教にも、忠恕を以て一貫すとあります、忠とは即ち私なきことで、此の忠恕の心さへ保てば、天の助けを得て、自然に富貴となることは間違ひありません、所で今日吾子の來訪に逢ひ、暫時應對を控へてゐたのは、吾子の此の忠恕の心掛け、即ち儉奢の心底を試さん爲でありました、即ち今宵は格別寒くもなきに、堆くおこれる炭火を、火箸を握りながら埋



めんともせず、又行燈に燈心の一把も燃へて居て用もないとき、灯立を取て耗さうともせず、これ等の濫費に氣の付かぬのは、之ぞ貧乏の證據ではありますまいが、されば以後、人も我も同様と氣が付き、忠恕の心をもつて勤儉を積まれたならば、最早我と同様の身代となられませう。

### 忠恕の取違へ

如何にも此の主人の答辨は誠に面白い、眞理を穿つてゐるものといつてよい、即ち富を求むる法を勤めずして、ヤレ運が悪いの、ソレ年廻りが悪かつたといふ、之は寧ろ貧乏を求めてゐるのである。若し金持にならんと思ふ者があるならば、之を求むる方法を先づ攻究して、造次にも顛沛にも、之を心掛けて居なければならぬ。それには





忠恕といふ心得があつて、自己平等に天物を暴殄せぬやうに注意しなくてはならぬ、他人の物であるから、使へと出して居る物は何の遠慮もなく使ふてよい、然し自分の物はさうは行かぬ、中々手軽に使ふてどうしやう、況んや他人に只使はれる杯といふは眞平御免といふのが、世間によくある吝嗇漢のする所で、かゝる男を知人や朋友の間にも往々見受けぬでもないが、それでは決して大なる成功を齎らさないのである。今の世は社會奉仕じやの、相互扶助じやのと、利いた風の言葉を喋々してゐるが、實は何れも自己奉仕と自家扶助ばかりを心掛けて居る、これは全くやり切れぬ話である。

### 目食耳視の世態

又かの支那で有名なる司馬温公が、或時人に向つて、世間の人は多くは目で食ひ、



耳にて視て居るが、之は嘆すべきの至りであるといはれた、そこで其の人驚いて、それは何故ですかと尋ねた所、其の答辨が頗る面白い。曰く、衣冠は容觀即ち見え形を作る所以である、體に適ふのを善しとする、然るに世人は其の適ふ所をさし置いて、時世の好尚を聞いて之を慕ひ形作つてゐる、是を耳にて視るといふのである。又飲食は味を爲す所以で、口に適ふのを善しとする、然るに世人は食物を朱に染めたり緑にしたり、或は種々の巧みを加へて食卓上の玩弄を事としてゐる、之は目を以て食ふといふものである、抑々目食耳視は奢侈の病を盡したる四字であつて、此の病は多く婦女より起つてゐる、思ふに淫蕩や華美の物は、其の本は好色の心より閨房を喜ばしめんとし、漸々にかく盛んになつて行くものである。

と、如何にも奇警の觀察である。所が此の温公の語を、例の錦城先生は敷衍して、滔





くゞとして言を費し、以て奢侈の戒むべく、而も好色の節すべきを説いて居られるが、是等の言は古今東西の歴史に徴しても、決して誤まつて居ない、恐らく今日の世人の如きは、所謂目食耳視の甚だしきものであらう、特にこれが婦女子より起る所多く、唯だ外観を飾ることにのみ婦人は苦慮百端し、男子も亦此の婦人の一顰一笑を買はんが爲に、奢侈を盡して外観を装ふてゐる、之ほど馬鹿らしく下らぬ事はないが、今や天下滔々としてそんな風であるのは、如何にも歎はしい次第である、さればこそ終に止むなくも、奢侈品輸入關稅の値上げとなり、更に内地奢侈品課税とまで、當局者をして法令を制定せしむるに至つたのである。

### 奢侈を戒むべき時

今日は實に奢侈濫澤を戒むべき秋である、奢侈は勿論何時の時代にも忌むべく避



くべきものであるけれども、今日の如くに奢侈品が外國よりドシ／＼輸入せられて、それが都會の商店のみでなく、地方の小都會、小部落の店頭にまでも、燦爛として光を放つて陳列されるといふ現代には、吾人にして若し節制克己の心がなかつたならばツイ浮か／＼と是等奢侈品に手を下すことゝなるのである、況んや多少にても財産の裕かなる者にあつては、ツイ思はずも入らぬ奢侈品をも買入ることゝなる、而して外観を装ふ事や、紳士淑女らしく見て貰ひたいなどいふ、下らぬチツボケな考へに捉へらるゝ時には、或は關稅が上つて、少々價格が高くなつても、反つて乃公は尙且つ此の如しと、依然として威張つて、奢侈品を求めることであらう、之はどうしても勤儉の必要を自覺する所がなくては、何にもならぬことである。

### 賢哲偉人の知足觀





前上に多くの談話を引用した太田錦城の平生の心掛けに就いて述べて見やう、先生は常に述懐していふ、「自分は幼少の時、母より一首の古歌を傳へられた、それは知足の必要を示されたもので、其の歌は、

餘所にのみ見てや止みなん葛城の

高間の山の峯の白雲

といふのであつた。さて此の歌の味を觀得した爲はや、自分は幼少より外物を羨み望む心を薄かしたものである」と、又、更に亡友の吉田某が或友人の歌として傳へたものを玩味したことがある、其の歌は、

かくてしも棲めば蓮の花にさへ

憂を忘るゝ蓬生の宿

といふのであつた。それが爲に自分は之をも玩味して、よく環堵の室（即ち九尺二間

の小屋をいふ）に安んずるを得たのである」と。

傳ふる所によるに、かの有名なる佛國のルツソーも嘗て、世態の奢侈に移り行くことを憤慨して「予は十二ヶ月間、餘り大なる家を持たんよりも、寧ろ一日餘、餘り小なる家を持たんことを欲す」といつたとある。之を外にして古今東西の歴史上、偉人と尊ばれ賢哲と崇められた人は、概ね皆外形物質の欲に捉へらるることなくして、知足安分したものである。而して其の潑刺たる意氣精神のみはどこまでも、向上發展して止まぬことを期した。之が眞に勤儉の趣旨に叶ふ行爲といふものである。されば普通一般の者の如きは、一層よく勤儉の眞意義を了得して、日常の生活を律すべきことである。實業界に立つ青年諸君も大に此の古人の行爲に學び倣ふ所がなくてはならぬ。







## 第五章 情氣袖手の戒

### 耐煩の二字

今の青年の最も通弊とする所は、物をうるさがることである。常に袖手してゐて、他人の爲にも自分の事にも、容易に手を下さうとしない、而して其の手を出すことを以て、何だか損の行くことのやうに思ふて居る、然しそれで以て將來に成功しやうなど考へて居るのは、了簡違ひの甚だしきものである。

此の世の中はうるさいものである。老人に對し小兒に對し、婦人に對して、一家の内でもよい加減にうるさいが、更に親戚や朋友や他人との關係に就ても、誠にうるさいものである、一體之が人間社會の状態で、其のうるさい間に處して如何にも愛相よ

く、如何にも面倒臭がらず、上にも下にも、友人にも、乃至老人女子供に至る迄に、親切な人、行届いた人、氣持のよい人といはれるやうにして行くは中々並大抵の事ではない、然し之をするとせぬと依て、人生の成功乃至幸福の分岐點であるといふ事に、早く氣の付いたものが、即ち利巧者であり、仕合せ者となるのである。

明の費元祿は、耐煩の二字を掲げて世人を戒めた、曰く、此の二字最も妙なり、能く煩に耐へば、天下何事か做すべからざらんと、呂氏の童蒙訓にも亦曰ふ、鹵莽にして煩を厭ふ者は、決して成すあるの理なしと。誠に經驗上、自得した名言といはねばならぬ、古來青年はどれも無精なものである。而して現代に於て最も其の弊の甚だしきを見る、之は世の中が何事も利便になつたから、其の便利に馴れて、自分の事にすら手間の入ることを、惜むからである。然し之は他人より見れば、之ほど不便利極まることはない。







### 成功及幸福の基

無精をして世に成功した例はない、煩を厭はず、萬遍なく根氣よく、四方八方に氣を配り心を勞してこそ、他人の氣受けも、社會の信用も増す道理である、かくてこそ又一方に人事を弛廢せしめず、他方に功業成就の端を發くのである。一體煩多なる事物の應接といふものは、これ人間世の常で、而して吾人の當さに爲すべき所である。何も餘計なことではない、之が分内の事である。自己分内の事を忍耐して、寧ろ甘受してあせらず、面倒がらず、而して序を逐ひ物に循ふて漸次に爲して行くならば、之が爲に心を苦め力を勞することもなくなつて来る、而して終に着々事功を擧げずには措かない、古への賢哲偉人は皆之を體驗したものである。而して後にはそれが心の累ひでないのみならず、却つて處世上の樂みとなつたものである。吾人は此の境致に達



する所がなくてはならぬ。古今東西の例を引いて見るまでもない、都會の人が少しく蓄財でもすると、多くは座食して安逸を貪る、無精の本である、それをよい事のやうに心得て居るが、焉んぞ知らん多くはそれが爲に病魔に襲はれて夭折する、然らざるも健康を害し、知識を衰へしめる、決してよい手本ではない、況んやこれから、成功せんとする青年に取つてをやである。

### 運、鈍、根

世俗の諺に、運、鈍、根の三を以て成功の秘訣とすといふのがある、運は天命なれば致方もない、然し鈍であるとは自覺してセツセと働く者こそ成功は招來せられ得る而して更に根氣を以て一生を押切つてこそ、そこに一大成功は招かずして来る、假令金錢に縁が薄くとも、其人は居常愉快であり、元氣であり幸福である、而して必ず健





康であり長壽であり得る、自惚れて才子振つて、懐手をして、氣まぐれであつて、決して成功するものではない。而して幸福も招来しなければ健康長壽でもあり得る道理がない。

かの幕末の大才子なる頼山陽が嘗て人に語つて、「我を才子といふは未だ我を知らざるものなり、我を刻苦せりといふものは、眞に我を知るものなり」といつたのは、夫子自ら其の苦心を語つたもので、全く勉學を續け鈍と根とで押切つたものである。即ち刻苦は無精の正反對である、又かの偉人山鹿素行も嘗て書生に示して曰ふ「大丈夫は唯だ今日の用を以て極となすべし、一日を積んで一月に至り、一月を積んで一年に至り、一年を積んで十年となる、十年相累りて百年たり、一日猶ほ遠し、一時にあり、一時猶ほ長し一刻にあり、一刻猶ほ餘りあり、一分にあり、こゝを以ていふときは、千萬歳のつもりも、一分より出で、一日に窮まれり、一分の間をゆるがせにすれ



ば、終に一日に至り、終りに一生の懈怠となるなり」と。これ全く無精を戒めたものに外ならぬのである。今の青年は先づ煩に耐へて、甘んじて刻苦する覺悟を定めねばならぬ、これ即ち成功の基である。

○詩人スコットが其の子、チャールズの遊學中に與へし書信

予は勞力といふ事が、社會の各方面に於ける吾人の爲に神の規定したる條件なるを如何ほど汝の心裡に刻せしめても、猶ほ且つ足らざるなり。農夫の粒々辛苦より成れる麵包より、紳士が消閑の爲にする遊戯に至るまで、勞力なくして得らるゝもの一としてあることなし、知識が勞苦なくして、人の心に植を付け得られざるは、猶ほ耕さざれば麥の生ぜざるが如し、勿論或者の蒔きたる所を、他の人が刈取る如く、場合、偶々なきにしもあらずといへども、何人も自己が勉強の結果を盗み去らるゝ

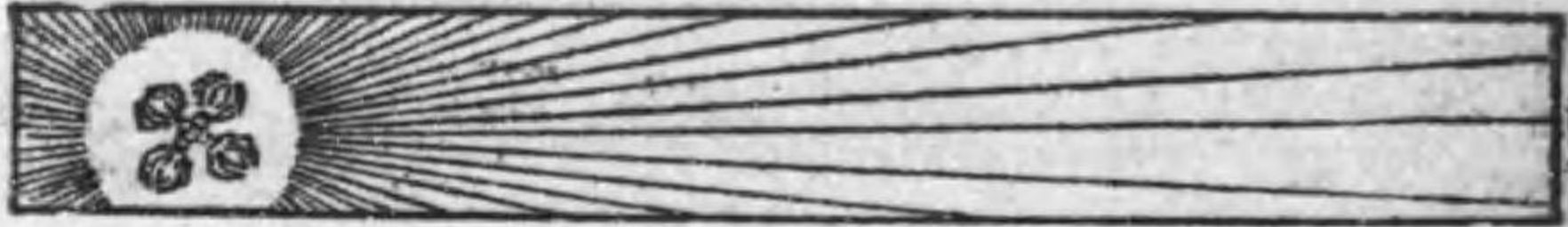




ことなく、其の自由にして該博なる知識の所得は、全く自己の用を爲すなり、されば吾が愛見よ、須らく勉むべし、光陰を惜むべし、若年の間は進歩も速く、心柔軟にして、容易に知識を貯へ得べしと雖も、若し吾人の春を等閑にせば、吾人の夏は無益にして厭ふべく、吾人の秋は廢物となり、吾人晩年の冬は荒寥として世に忘れらるゝに至らん。

### 勤勞の習慣

仕事に馴養せられたる官能を有せる人は、自然に怠惰に堪へ得られざるやうになるほど、勤勞の習慣を得るものなり、而して萬一、或事情の爲に、自己の専門とせる職業外に逐出さるゝことあるとも、更に他の方面に仕事を求めて、怠惰を逃るゝの隠れ場と爲す、凡そ勤勉なる人は、其の閑暇の中に仕事を發見すること早し、而も



怠惰なる人が、却つて閑暇を發見し得ざるに、勤勉なる人は、多忙の中に能く餘暇を作り出すことを得るなり。ジョーヂ、ハーバート曰く、「閑暇を利用せざる人は即ち閑暇なきなり」と、又、ベーコンも曰く、「凡そ最も活潑なる人、多忙なる人は必ず多く餘暇を有するものなり」と、されば天下の大事業は、かゝる餘暇に於ける手明きの時期に於て、勤勉第二の天性となり、逸樂よりも仕事を樂みとするが如き人に由りて爲されたるなり。皆服膺すべき名言である。





### 第六章 餘裕心の修養

#### 沈着と知足の要

吾人の處世上には、どうしても沈着即ち落付きといふものが必要である。若し之がないときには、ツイ急いで事を仕損するの基ともなり、或はいらぬ事に腹を立て、後悔するやうなことが出来る、所が此の落付といふものは、中々平素の修養が積みまぬと、ハツキリ我が物が物とすることが出来ないものであるから、吾人は何よりも先づ知徳の併進を心掛け、別けても反省といふことを實行せねばならぬ。

然しながら餘裕心といふものは、沈着の徳ばかりでは未だ十分といふ譯に行かぬ、必ずや之と共に自己の地位境遇に安住して、孜々として働くと同時に、知足して物事に



に恬淡寡慾でなくては、容易に縛々たる餘裕を心境の裡に藏めて置くことは出来ないのである、即ち沈着と知足との両者が相待つて、始めて完全に心の餘裕を保ち得るのである、而して其の餘裕ある精神状態の下に漸次に寛忍といふ大徳が積み養はるゝのである。

#### 一 禪僧の逸話

之に就て、面白い事實談を古書の中に發見した。昔し關東の一禪僧が、長老にならうとて、檀家より醸金して若干の勸進を得た上、京都へ上つた所が、途中にて盜賊に出逢ひ、スツカリ其の金子を奪はれて了つた、而して之が爲め上洛したものゝ、言譯なくして國許へは歸れず、さればといつて、目的を達する途もなく、途方に暮れて空しく某處に逗留して居た、時に彼が何の爲す所もなく、逗留數日に及び、而も元氣さ





うに遊んで居たから、京の人が之を訝り、何故かくは長逗留に及ばるゝかと尋ねた所、其の僧は之に答へて、正直に其の有りし次第を爾々と物語り、自分は其の時一首の歌をよんだ、そしてそれにて、ヤツと心を慰め、歸國もせず滞在してゐるが、最早在京の費用も實は缺乏を告げて居るといつた、かくて一片の紙を示したから、京の人がそれを取上げてよんで見た所、

苦みの海を渡れば墨染の

袖にもかゝる沖つ白波

世に盜賊の事を白波と異稱するから、それに引かけて自己の境界をよみ、而もこれも免れ難い運命であらうと、如何にもよく諦めたものであつた。これを見て京の人は大に感じ入り、それはマア、御氣の毒な事やサカイ、どうなと私共が致しませうと、それより懇意の人に此事を物語つた所、語り傳へて皆々感心し、左程の悟りの開けた



坊サンなら、御世話するのが宜しからうといふに一決し、一同醵金して長老になり得る金子を調達し、遂に彼の目的を達せしめ、やがて一同めでたしくと祝杯を上げて、其の僧は間もなく歸國したといふことである。何と此の盜賊に見舞はれても左程驚かず、而も徒に悲觀厭世もせず、之は全く災難で又自分の因縁でもあらうと、とんと打切つて了つた所に心の餘裕といふものを發見せらるゝではないか、之は畢竟沈着と知足との賜に外ならぬのである。

### 文藝家佳話

話は少し變るが、かの有名なる宗祇法師が曾て途上にて盜賊に逢ひ、スツカリ其の財布を取上げられ、而もおまけに其の房々とした白髯をも所望せられ、爲に悠々として「我が爲に筈ばかりは許せかし、浮世の塵をはきすつるまで」と一首をよんだとい





ふと同一轡である、又かの有名なる白河樂翁公の感に入つたといふ俳句の二に、總州の俳人某が、冬の日泥坊に見舞はれて、スツカリ綺麗に其の財寶を呉れてやり、唯だ僅かに、原祇自筆の伊勢物語と、床の間なる末の松山の文臺とを殘させ、やがて賊の立去る後、姿を眺めながら、思はずも「盗人も跡さして行く夜寒かな」と獨吟したのを、賊共歸り窺ふて之を聞き感に堪へていふ、「かゝる面白き人とは知らず、失禮しました」と、直ちに盗める財寶を悉く返し、而も多くの金子を與へて立去らうとした、それを彼は辭退した所、數日の後、何處ともなく、樽肴にのし包を添へて、之を籠の前に置いてあつたといふ逸話も、前と殆ど其の軌を一にして居る。之も全く沈着と知足との賜である。

獨り禪僧や俳人のみではない、近世の儒者などの傑出した人々にあつては、多くは恬淡寡慾にして居常赤貧に甘んじ、而も沈着にしてよく家國の爲に慷慨其の身を許



したものであつた、かの備後の菅茶山が、一日友人なる安藝の頼春水を訪問すると、春水は赤貧洗ふが如くであつたから、いつも白地の古羽織のみを着て居た、それを見

て茶山が戯れに、  
いつ見ても色は變らぬ此の羽織  
と口吟んだ所、春水はすかさず、

おまへの袴幾代經ぬらん  
と返報した、之には春水も一本参つたが、實は彼はいつもビタ／＼の同一袴を穿いて居たのであつた。

### 國學者仲間の笑話

尙ほ國學者仲間にも面白い逸話がある、少しく滑稽に屬するが、之にて其の氣質の





程を窺ひ知ることが出来る、傳へいふ、有名なる歌人加藤千蔭翁の月次の會日に、加茂季鷹と安田躬弦の兩人が打連れ立ちて參會した、時に四方山の物語の末に千蔭翁曰く「本居宣長はヒドイ金髻である」と笑つて語つたのを、傍より聞ける躬弦は早速に「宣長がかなつんぼなれば、千蔭先生は眞名髻でありませう」と滑稽を交へて語つたけれども、それが千蔭翁にはチツとも聞えない、そこで居合す人々大に笑ひ崩れたが季鷹も亦髻の事として、それが聞えずして、何が何やら分らなかつたといふ。此の笑話を此の時會合の連中が或君侯の前にて物語つた所、侯には聞いて大に興がらせ給ひ、やがて宣はく、近頃季鷹の狂歌にそれをよんだものがあるとして、

我耳の遠くなりしは年を経て

聞えぬ歌をよみし報いか

と、此の一首を披露し給ふた、所が席隅に居りし老人の醫師が之を聞き、それほど



歌を賞讃し給ふなら、拙者とても、よめと仰せあらば、早速よみも致しませうと大言した、そこで侯は心にくしと思しけん、さらば直ちによめと宣ふた所、醫師は即座に、

我耳の遠くなりしは年を経て

きかぬ藥を盛りし報いか

とよんだから、侯は其の頓智に感じて、無禮を尤めず、却つて大に賞美したまふたといふ。一席の笑話に過ぎないが、然し心に餘裕のある者でなくては、到底出来ぬ藝當である。

### 加茂季鷹の教訓歌

季鷹の事を語つた序に一私事を付け加へて置かう、此の季鷹は京都加茂の祠官で、

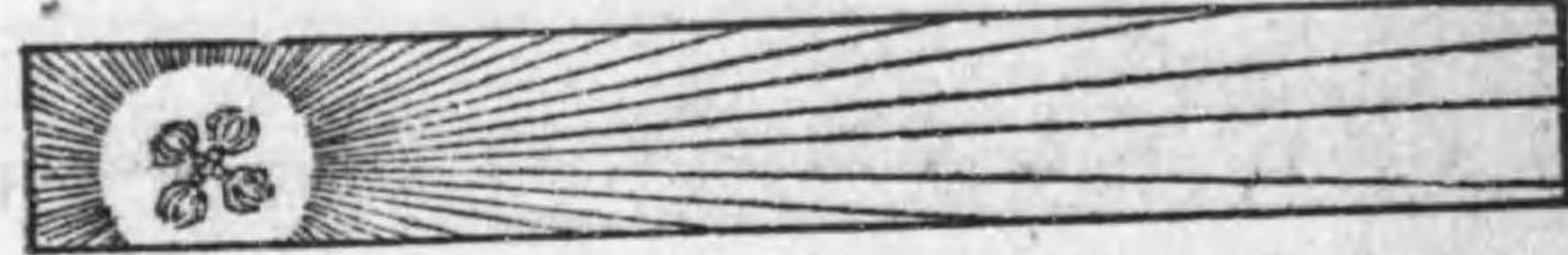




姓は山本氏正四位下安房守に任ぜられ、雲錦亭と號し、初め有栖川織仁親王の門に入りて詠歌を修め、後ち江戸に出で、加藤千蔭と交り、其の學益々進みて、文名遂に海内に振ひ、樵夫牧童といふとも、當時其の名を知らぬ者はなかつたといふ、之は一に狂歌をよくして、俚耳に入り易く、而も後には其の門に入りて學ぶ者、上は貴公子より下は戯場の俳優に至るまで、無慮數千人に及んだからであらう、而して其の名の高まると共に、其の詠歌の揮毫を乞ふ者が、門前に市を爲すに至つたといふ。かくて天保十三年九月に九十一歳の高齡を以て終つたといふは、誠に果報めでたき畸人である、されば、予輩は此の人の書いた長軸を大阪の友人より贈られて今に所持してゐるが、其の文字は「一實勝千虛」と題して、

百千々にあやなす人の言の葉は

ひとつ眞言に及ばずぞありける



とよんである、中々之は道德的名歌であつて、兎角喋々喃喃々と追従輕薄を語る人よりも、恭黙して道をも思ふ人の一言こそ、誠に頼母しいものであるとの意を訓戒したものであらう、して見れば、彼は必ずしも滑稽にして、徒に名を求めた輕薄兒でなかつたことを推測せらるゝのである。

### 貝原益軒の訓言

要するに吾人は平生注意して、心に餘裕を生ずるやうにと心掛くべきことである、それには毎日注意して心身修養の工夫を積み重ねゝばならぬ、それに就ては種々の方法もあるが、貝原益軒の左の文字の如きは、確かに吾人治心の工夫を明示したものである。

#### ○堪忍の工夫





人の我に對して、無禮、横逆あり、又事不順ありて、わが心にかなはざることあらば、是れすなはち、善心をおこし、私慾をこらふる學問のつとめ、徳のすゝむ所なりと思ひ、人の不順なるを堪忍し、我が身をかへりみ、心をせめおさへて、怒をおこし、欲をふさぎ、善にうつり、過を改むべし、かやうのわが心術をつとむべき折節を仇におもひて、徒に過すべからず、かく心にかなはざる所を、よくこらへつとめてこそ、我が心の徳も學問も、すゝむべき理なり、かゝることにあはざれば心を治め欲を忍ぶ工夫すゝます。

○待の字

萬事を行ふに待といふ字を用ふべし。待とは急ならざること、いそがずして、心しづかに思案し、詳かに行ふをいふ、かくの如くすれば、過ち少し、事を行ふにいそがはしく急なれば、必ずあやまりあり、程子も「事急を以てして敗るゝ者十常



に七八」といへり。待とは急ならざらことは、詳かにして、いそがず、よく思案するをいふ。怠りゆるかせにして、急なることをいそがず、時におくるゝはあし。

○從容不迫

つねの氣象は、從容不迫、此の四字を守るべし。從容とは、おもむろにして、しづかなるをいふ、すみやかにいそがはしき時も、心平かに氣和にして、樂を失ふべからず、事多くとも、心はしづかなるべし、しづかならざれば、あやまる事多し。人の我に對して、いかになさけなく、無禮なりとも、いかりて言をはげしくし、目をいらゝげ、きたなき氣色をあらはして、樂みを失ふべからず、つねに其の氣象、從容不迫なるべし。

皆これ實地經驗上より自得せられたる治心法で、所謂心に餘裕を生ずる道に外ならぬ





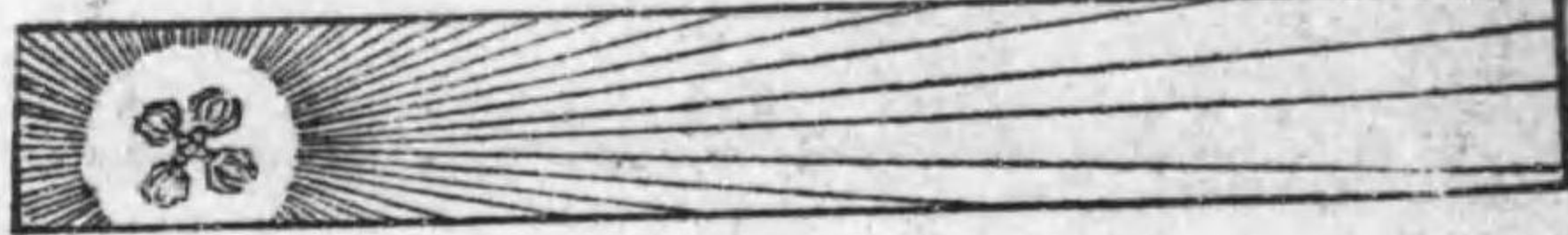
日本精神と修養  
 のである、何れも後進青年の服膺すべき金言でないものはない。

八四

## 第七章 將來の處世觀

### 處世上、二つの行方

更に予輩は現代青少年諸君の爲に、聊か將來の處世觀を述べて見たいと思ふ、抑々古へより、人として此の世を渡つて行く行方に凡そ二通りある、其の一は少しく自暴自棄的で太く短くやつ付けやうといふのである。どうせ此の世の中は社會制度や約束や、風俗習慣や義理人情と種々雑多のものに、束縛せられ纏綿せられ又擲なくせら



れて、思ふやうになるものではない。而も人生は僅かに五十年、六十にして耳順ひ、七十は古來稀なりといふほどで、これ亦甚だ頼りないものである、されば苟くも生を人間に稟け得たる者は、其の氣息ある内に宜しく有生の樂みを知れといふのである。此に於てか世俗の所謂「若い時は二度ない、儲けたらバツバと使へ、どうせ持つて行ける金ではなし」といふことになつて來る、随分思ひ切りのよい痛快な主義である。けれども之が萬人が萬人ながら通し果せるかといふに、それは頗る覺束ない。蓋し人には生存慾といふものがあり、一日にても長く生きたいと思ふのが人世の常情である而して人には老病死苦といつて、種々の悩みがあつて、いつも健康體といふことは出來ない。乃ち健康な時は随分強いことをいふやうでも、少しく病に罹るとか年を取るとか貧苦に迫るとかいふと、其の頑強な意志はいつしか崩けて了ふ、而して到底太く短く、テキパキとやり續けて行くことが出來ぬやうになる、此に於てか此の主義と反





對に、どうせ儘ならぬ浮世で、自分の思ひ通りに行かぬとしたら、マア／＼我慢をして、辛抱をして、細く長く渡つて行かうといふことになる。之が即ち第二の行方である、細く長く渡世しやうといふ主義の由て生ずる所以である。

### 兩主義の比較

所謂細く長くといふ方は、太く短くの自暴自棄的なるに對して、稍々自重的である又前者の自己本位一名主義的なるに比して、後者は顧慮的であり、環境を振返つて自己の立場を定めんとする對他的のものである。そこに兩者の行方の相違はあるので、比較して見れば先づ後者の方が妥當であり安全主義といはねばならぬ。即ち社會が安定して秩序が立ち、國家が其上に立てられて綱紀が維がれ、人々は約束を守り契約を重んじて信用が行はれ、不正不義は排斥せられ、義理人情は頼母しい者に思はれるとい



ふに至つて、所謂醇厚の俗は世の中によく行はれるのである、而してかゝる世の中には、吾人はどうしても細く長くといふ主義にツイ據なくせられて了ふのである。太く短くでは、どうしても現制度を破壊してかゝらねばならず、又秩序を破つたり、不正不義に陥らねばならぬ。そこで結局人は從順にして互に妥協的たれよといふことになるのである。

### 處世の古訓

さればこそ昔より吾人の處世觀として、「人は人の有るべきやうにあれ、又人らしくせよ」といふことを唱道し、又終に之を實行するに至つた、即ち人らしくして世に立ち、有るべきやうに其の身家を持して居れば、それで自他の間には禮儀も行はれ義理も立ち又不正不義も行はれずして安全第一たり得るに相違ない。それで古訓には卑





近な譬喩を以て、牛は牛のあるべきやう、馬は馬のあるべきやう、犬猫は犬猫のあるべきやうにそれ／＼其の位を守り、其の職を務めて居るやうに人も餘計な事をするな而して其の位に安んじ其の職に勤めよ、それが安全第一の法であるといふ風に説き示すに至つたものである、所がどうも人間のみは、前に所謂太く短き主義といふものがあるから、往々にしてそれが顔を出し頭を擡げるので、終に人らしく、又有るべきやうにジツとして居らぬ者がある、而して不正不義も働けば不埒千萬の事をもするに至る、そこで古歌には、

牛馬は皆牛馬といはるれど

人こそ人といはれ兼ねる

とよんで深く吾人を戒むるに至つた。

### 苟且偷安の弊

所が結局かく妥協的であるといふことは、人をして往々卑屈因循に陥らしむる虞れがある、俗語に「長い物には捲かれよ」などといふのがそれで、終には其の傾向の爲に、成るべく多く他に頭を下げて而して成るべく多く自分は懐手をして、かくて成るべく樂々と幸福に世を送つて行かうと希望するに至つたのである、それはツマリ苟且偷安主義といふものであつて、吾人の大に戒め避けねばならぬ所である。されば昔の石門心學の説話中にもこんなものがある。即ち或る一人のフザけた怠け者の弟子が、或時師匠の石田梅巖に向つて、一首の歌を示し、

世の中は假りの世なればかるもよし

夢の世なれば寝て居るもよし







とからかつたことがある。所が之を耳にせる梅巖は何にも言はず、黙つて返歌をして之を戒めた、曰く

九〇

世の中は假りの世なれどかりにくし

夢の世なれど寝ては暮せず

全くこれに相違ない。

### 無形的、精神的の任務

思ふに吾人の處世に就て、一に妥協的なれ又安全第一なれといふのは、それは吾人の行住座臥や交際上に於て有形的、物質的にはかくあれよといふものに過ぎない、さればそれとは異方面なる無形的、精神的に於ては、何にも他に遠慮する要もなし、又憚る所は更にないのであるから、吾人は宜しく知能を啓發し、徳器を成就することに



努力するがよい、それは結局自己を完成する所以で、此の事は決し一妥協的や安全第一主義を守る必要はない、寧ろ進んでどこまでも力の及ぶ限り、又出来得るだけ吾人は之を向上發展せしむべきことである。特に今日は四民平等の世の中である、而してアラユル自由は付與せられ、爲に上下貴賤の別なく、何人も皆自己を完成して、國家社會の爲に貢献寄與するのが、吾人の最高本務なりと途唱道せられて居るのである。されば吾人は其の日常の生活上や交際上には宜しく知足安分し、又禮儀を守り、専ら信用を高むるの必要はあつても、吾人が自己の身家を高め又其の精神を向上せしむるといふ事に就ては、何等遠慮も入らぬ、躊躇も要せぬ。即ち吾人は此點には毫も顧慮する所なくして、須らく向上發展を期すべきである、そこに所謂勤勉努力といふことの必要を生じて來るのである。





五字七字戒の訂正

所が昔は之に異なり、四民の階級は明確に立てられ、従つて四民それ／＼に其の盡すべき義務本分なるものが異なつて居た。それ故に無形的、精神的の事に就ても、多くは之が向上發展を壓迫し制限した傾がある、かの徳川家康の五字七字の戒といふ如きがそれであつた。即ち五字とは上を見なであつて、七字とは身の程を知れといふのである。成程今でも身の程を知るべき必要はあるが、然しながら吾人が精神的に向上發展を期するに何の遠慮も入らぬ、即ち上を見な戒では少しく矛盾することゝなる、そこで予輩は常に此の訓戒を現代的にかく改めよと説いて居る、即ち上を見ないはずして上を見よといふのである。

蓋し上を見よといふのは、主として向上的精神をいふ、即ちどこまでも吾人は勤勉



して、己が身家を高めんと志し、又其の知能を啓發して己が従事せる事業を盛大にし同時に徳器を成就して、吾人の品性を陶冶し、人格を向上せしめて、世に所謂紳士紳商として社會の表面に立つべきことである、之が吾人の處世上今日にては最も必要な心掛となつたのである。然し乍ら此の上を見よと並行して、無論吾人は古の如く今も身の程を知り、所謂知足的行為を以て満足し、世の所謂虚榮虚飾に陥らず、又華美贅澤といふものを斥けて、詔書に示されたる如く華を去り實に就きて、大に質實剛健の民風を形造るやうにせねばならぬことである、之が即ち教育勅語や戊申詔書の御旨を奉體する所以であつて、而して特に震災後に下されたる國民精神作興詔書の御趣旨に適ふ所以たるに外ならぬのである。短言すれば上を見よとは無形的、精神的なるを指していひ、身の程を知れとは、有形的、物質的を指すものと覺悟すればよいのである。





### 進んで考ふべき一要件

青少年諸君よ、諸君は今後須らく向上的精神を以て、事に従ひ、而して居常知足的行爲を以て満足し、以て勤と儉とを並せ行ひ、又荒怠相戒めて、自強して已まぬやうにせねばならぬことである。所が此の間尙ほ進んで考ふべき要件がある、それは外でもない、宜しく現代の文化を考察して、大に世界的に眼を注ぎ、尙且つ自己の立場を明かにして一層之を確實なるものたらしめ、以て頂天立地今後の社會に處せよといふ一事である。

### 現代文明の廣がり

蓋し現代文明は、之を大觀すれば平面的に横に益々擴大せられ延長せられて行く



同時に、立體的に縦の方にも益々建設せられ延長せられつゝあるのである。一例を以てすれば之を交通運輸の事に見ても、其の文化は年と共に益々横に廣がり行きつゝあることを知らるゝであらう。従つて世界の國土は益々狭めらるゝの感があり、而して之が爲に通商貿易の事に至つては、殆ど世界を通じて萬遍なく行はれ、所謂四海同胞主義が着々として實現せられつゝあるのである。かゝる時に當り、吾人にして姑息因循したり或は頑固一點張であつたり、又は偏狹であつてはならぬ。須らく各自其の眼光を遠大にして宇內的、世界的たらしめねばならぬ。即ち發明の事然り學術上の研究然り文藝、宗教一として皆然らざるものはないのである。

之と同時に世相は益々縦に立體的に延びつゝあるといふことは、かの建築の一例を以てしてもよく判る。即ち地上には七階八階と屋上屋を架すといふ風であつて、而も地下では又食堂あり貯藏室ありといふ風に深くなりつゝある、従つて鐵筋コンクリー





トの根強き基礎工事は之が爲に施さるゝといふことになつたのである。此の如きは萬事萬端皆然りであつて、即ち研究の事に於ても發明の事に就ても年と共に益々深く根強きものとなりつゝある、而して文藝や宗教の事に至つても、勿論相伴ふてかゝらねばならぬ時勢となりつゝあるのである。

日本精神と修養

九六

### 現代青年への饒け

諸君よ、仰いで天空を見れば、今や蒼穹遙かに飛行機は鳥の如く飛翔して居る、俯して地下を見れば今や海底深く潜航事業は魚の如く行はれて居る、これ抑々何を語るものであるか、言ふまでもなく、一般の世相が縦に横に共に擴がりつゝあるものといはねばならぬ、他語以ていへば平面的に擴がり立體的に深まりつゝあるのである、然れば諸君の覺悟も亦時勢に伴れて宜しく廣く深く、古人の所謂高且大たるものとならね



ばならぬ。されば今後の吾人はどこまでも向上的精神を振起して、どこまでも世界的に發展することを勉め、切に卑屈因循であることを戒めねばならぬ、又苟且偷安であつてもならぬ。即ち常に其の眼光を遠大にし度量を廣潤にして、大々的の進歩を計畫し、以て世界の進歩に後れざるやうに奮勵努力せねばならぬことである、古歌に所謂、

上見れば及ばぬことの多かりき

笠きて暮らせ己が心に

といふ如きは直ちに之を訂正して、

上見れば我にまさりし人もなし

笠とりて見よ空の高さを

とせねばならぬ、即ち所謂「天上天下唯我獨尊」の主義精神を以て何處までも一

日本精神と修養

九七





貫して、吾人の行動を邁進せしむべく、而して其の結果驚天動地なる、實質内容相伴へる効驗を示し齎らすべき必要がある。予輩は今此の希望を以て之を現代の青少年諸君に饒としたいと思ふのである。

## 第八章 今後の讀書觀

### 讀書の今昔

東洋に於ける古人の讀書は、主として人の道を究めん爲であつて、讀書は即ち學者だけの仕事のやうになつて居た。所が今日はさうでなくして、讀書に依りて有ゆる日



用百般の知識を收得するのであるから、其の志す所は那邊に存するとしても、第一に讀書せねばならぬ。讀書は今日にては、萬人共通の必須條件となつたからである。曩に日本圖書館協會の主唱で「圖書館週間」の運動があり、而して都邑に於ける讀書奨励の宣傳を見たのは、誠に時宜を得た企であつた。然し其の反面には、之に依りて我が國民が依然として讀書といふことを以て、一部學者の仕事と心得て居る迷夢より覺めて居ないことを立證するもので、これほど情けないことはない。否な之は文明國民として、日本人なる者の恥辱といつて不可はないのである。

### 古人特殊の讀書

かくいへば古人は悉く人道發揮の爲にのみ讀書したように思へるが、然し仔細に考査すると、古人といへども、必ずしもさうではなかつたことを看取せられる。試み





に見よ、古への歌聖俳匠が讀書したのは、人倫道德の講明以外に於て、吾人の情操を養ひ趣味性を豊かにせん爲であつて、一種の感情教育に耽つたものと謂つて可からう、又皇學家が考證復古の學を唱へて、有ゆる典籍を探り、國語の始源に遡つたのも、亦これ我が國體の精神の那邊に存するかを究明せんとした努力ではなかつたか。特に醫師や本草家が蘭書に眼を曝して之を攻究し、有ゆる物産を諸國に探查し、又之を蕃殖せしめたのは、所謂人命救助の爲の治療衛生學等の闡明の爲ではなかつたか。此等も皆古代に於ける讀書の人世に切實なるを語るものである。

本を忘れたる態度

思ふに我が邦人が從來讀書を以て一部學者の仕事とし、又人倫究明以外に要なきものゝ如く見做し、前掲の史的講究すらも、之を遺忘して居た如き傾向のあつたのは、



遂に今日に於ける國民思想を動搖せしむる一素因を爲したものではなかつたか。又靜觀すればかの醫學や衛生學上より觀ても、居常肉食を主とする西洋人相手の學問技術のみ我に受け入れる事に依りて、我が邦人の健康増進に資し又所謂延命長壽の上に益せんとした如きは、餘りに輕卒で、頗る思慮を缺いた所爲ではなかつたらうか。

己を知らざりし迂濶

吾人は列國對峙の今日、我が國民の體格、體力、精神力を向上發展せしむる事の必要なるを痛感するものである。然もそれに就いても其の本を忘れて末に趨り、彼に精しくして我に粗であり、結局己れを知らずして他の長のみを見、専ら彼等に模倣するを以て能事と心得て居た缺陷を指摘せずには措けないのである。かの一溪道三翁(曲直衛正慶)や安元法印(多紀元簡)の養生論、養生歌が、テツキリ今日の二木博士等の

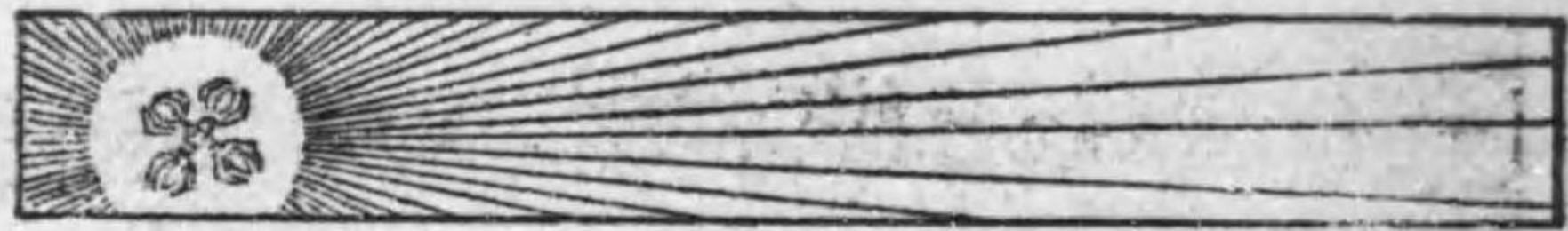




所論と一致して居るのを見ても、我が邦人たる者は、今に於て一考も二考もせずばなるまい。ツマリ我が邦人には、我が國民に適する食療法なるものがあり、又衛生學があり、健康法があり、養生術があるといふことを考へず居るといふ迂濶さを指摘せずには指けないのである。

### 古典講明の要

更に我が大日本帝國の今日ある所以の根柢、即ち我が國體の精華に至つては、蓋し其の淵源由來する所の、極めて幽遠にして深厚なるものがあり、而して歐米諸國のそれに比して微妙にして獨特なるものであるのを、今一層明確に擧得して置く必要があつたのではなからうか、之は今日に於て我が邦人が、古人に比して一層より深くより強く、古典學を講明する必要が存することと思ふ、それは必ずしも眞博士の彌榮の言



にのみ喫驚の眼を見張るのみが能事ではあるまい、たとひ偏狹といへども彼の吉川惟足の國粹論、山崎垂加の國體觀に遡つてまで、より深くより熱心に、之に考究し闡明する必要があると思はるゝのである。我が國民にして此の根本的觀念の淵源する所を知り、日本國としての地位を自覺せざる限りは、かの難波某の如き大不敬漢、大不心得者を生ぜしむる所以の邪道を、將來に杜絶し得ざることを憂ふるものである。

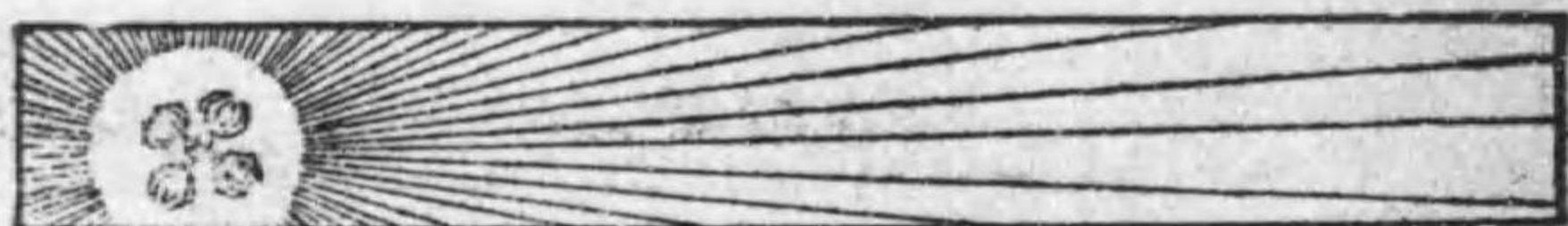
### 彼を知ると共に己れを知れ

固より今日にては、世界の大事に通することも必要であり、又國際的知識を養ふことも必要であり、又それ／＼に己が従事する學術の攻究に向つて、海外學者の新研究新發明を受け入れることの講學も十分必要である。然しながら我が邦人としては、己が肉を成し己が血を成す所以の根源なる國體風俗の淵源由來する所を闡明し、それ等





國粹的知識を養ひ、之を趣味し之を涵養して置くといふことの必要は、今日の如き民族的競争の激烈なる世代にありては、一層重大視して居らねばならぬ筈である。實に今世は國民として民族的に自覺する所がなくてはならぬ秋である。即ち浮華輕佻を戒め、唯だ歐米の風俗に倣はんと競ふたり、或は單に新を趁ひ舊を排し、延いて國民思想の上に、一大缺陷を生ぜしむる如き、根柢なく精神なく、氣魄なき、而して愛國尊王の國民性を喪失する如き態度は、大に戒め避けねばならぬ、殊に希臘羅馬の末路に於ける淫蕩浮薄の狀態を以て得たる如き才子佳人等を生ぜしむる傾向を、切實に除去する所がなくてはならぬ。實に吾人の今の時恐れても戒むべきは、彼を知らず己れを知らざる偏狹と共に、又彼を知つても全然己れを知らぬといふ片務的、管見的盲目の行動を慎み戒めねばならぬこと、思はるゝのである。



### 教化團體聯合會の決議

此の時に當り我が教化團體聯合會が、内閣の諮問なる「時局に鑑み、國民一般に實行すべき緊急重要な事項如何」に對して、決議したる條項中に、第一に「國體の觀念を明確にし、敬神崇祖の念を涵養すること」を掲げ、又更に「模倣の風習に安んぜず、更に文化の創造に努むること」と擧げたのは、最も吾人の意を強くした所のものである。而して之ぞ實に時宜を得たる條項なるを思はしめた。然しながら、かく單に抽象的に述べただけで、前陳せる如き、より深切に、より熱誠に我が國體觀念の根柢に就いて、之を講究し闡明し、而して我が國民をして、今後の向ふ所を十分に知らしめるのでなくては、恐らくは、此等條項も、終に空文徒法に屬するの虞れなきやを危ぶむものである。





### 先哲の讀書訓

讀書の功能は今更茲に嘸々するの必要を認めない、唯だ青年諸君の注意を喚起する爲に、一二先哲の名言を紹介して置くこととしやう。かの支那の顔之推の讀書訓の如きは、吾人の修身處世上に、最も切實なるを覺ゆるものである。

書を讀んで大に成就すること能はずとも、猶ほ一藝となつて以て自ら資することを得ん、父兄は常に依るべからず、兄弟は常に保つべからず、一旦流離して人の庇蔭なくんば、當さに自ら之を身に求むべきのみ。

財を積むこと千萬なるは、薄伎の身に在るに如かず、伎の習ひ易うして貴ぶべきものは、讀書に如くはなし。世人賢愚を問はず、皆人を識ることの多く、事を見ることの廣からんことを欲す、而も肯へて書を讀まずば、それ猶ほ飽かんことを求めて



而も饑を營むに懶く、暖を欲して衣を裁するに惰るが如きなり。

又、我國にては、かの貝原益軒の讀書觀の如きが、最も平易通俗にして、吾人後進を啓發せしむるに足るの深きものである。曰く。

書を讀めば千歳の後より千歳の前の人にあひ見ゆ、我れ如き愚者といへども、古への聖賢にみづから對して、まのあたり其の教をうくるが如し。其の望高くして大なること天の如く、深くして廣きこと海の如し。學問の道の大なること、天と海との外には、たとふべきものなし。此の故に、天下の樂み之に似たるはなし。世人此の樂みを知らず、大なる不幸なり、たとへば日本に居て富士のたけ、吉野の花を見ざる人だに、みせまほし、況んや世の人に此の書を見せまほしく、此の道を知らせまほし。人となりて書をよまずして、此の道をうかがはざる人は、きはめて不幸の人にて、人となれる樂みなし、あはれむべし。





又、讀書と人道との關係に及びていふ、人生れて學ばされば生れざると同じ。學んで道を知らされば學ばざると同じ、知て行ふこと能はされば知らざると同じ。故に人なる者は必ず學ばざるべからず、學を爲す者は必ず道を知らざるべからず、道を知る者は必ず行はざるべからず。吾人は苟も生れて讀書子とならねばならぬ、而して道を知り道を行ふの讀書子とならねばならぬのである。

## 第一章 國民刻下の二大標的

### 自己保存と自己犠牲

抑々吾人々間は單獨に生活せず、社會といふものを造つて始めて其の生を續けて居るのである、而して又其の社會の中にもそれ／＼其上に國家を造つて漸く其の生を安全、保障されて居るのである。即ちかゝる關係の下に立つ以上は、吾人はどうしても一方に於て、自己を高め自己を富ますと同時に、他方に於て人の爲にもなり世の爲め國の爲にもならねばならぬ。之が今日の所謂自己保存の必要と同時に自己犠牲の必要なる所以である。

さて今日の如き不景氣の世の中には、此の自己保存といふことに何人も一生懸命で







なければならぬ、自己立つことを得ずしては、到底人の爲め世の爲に働くを得ないからである。然しかる際でも若し此の國家、此の社會が安全無事でなかつたならば、如何に吾人にして努力しても、其の効果を擧ぐることを得ないことは、既に歴史上、屢次の戦亂の爲に、生民が塗炭の苦を嘗めさせられたのを見ても判る。されば吾人はかゝる際にも矢張り自己の働以外に國家社會のあることを忘れてはならぬ、即ち第一、自己の働きは即ち間接には國家社會に貢獻寄與するものなることを悟りて、眞剣に努力すべく、而して第二には消極的ながら、萬人一様に國家社會の進歩發達に對して障礙を與へぬだけの心掛を有て居なければならぬ、即ち之が國體風俗の如何といふものをも、眼中に入れ置かねばならぬ所以である。

### 國家社會構成の一分子



所が今日にては、大に自己に目覺めたりとて、社會の不平等を憤り、自己權利の要求が盛んであつて、自づと階級闘争を惹起し、或は勞資の争議を大ならしめてゐる之も無論至當の要求で、自由平等觀より見て無理ならぬ所もあるが、然し是等を要求する權利ある反面には、國民として社會人として、國の爲め世の爲めに大に盡すべき義務のあることを知らねばならぬ、即ち先づ己が國家の一人、社會の一員であることを認識し、自己の行動を律して、それが爲に社會の秩序を紊したり、國家の存在を危くする如き行動があつてはならぬ。思ふに曩に御詔書の煥發となつて、國民の輕佻詭激を戒め給ふたのは、全く此等の點を警告せられたものと拜察するのである。之を平たく具體的にいへば、吾人は漫に國の害となり世の妨げとなる如き行動を慎まねばならぬ、即ち社會主義じや、共產主義じやといふ如き主義を鵜呑みにして、人生の理想通り直ちに之を實行せんと期し、輕舉暴動してはならぬのである、一體、世の





中の事は理窟一點張りで立ち行くものでもなく、特に我が日本國の如きは、國初以來萬國に特殊なる國體風俗を形成して今日に至つたもので、それが爲に自他上下の關係が固き約束の下に其の秩序が保たれ其の綱紀が維かれてゐるのである。されば吾人は此の國體、風俗、習慣の下に安住しつゝ、時勢につれて漸次に之が改良進歩を圖り、而して同時に自己保存の爲に活動することを忘れてはならぬのである。

### 家國の不祥事

我國は一昨々年の關東大震災以來所謂ケチの付き初めといはうか、世間一體に不景氣の上に、搗て加へて貿易は不振となり、入超に次ぐに入超を以てし、爲に爲替相場一時は暴落し、其上泣き面に蜂の窺ある米國の排日問題が露骨にも手きびしく現はれ、引續いては隣邦支那の日貨排斥となつて我が商業は大打撃を被つたのである。



之は古語に所謂、内憂外患の交々到れるもので、残念ながら國の不祥事に循り逢ふたものといはねばならぬ。されば此際國民一般は之を徒に其の成行にのみ任して放心して居ることは出来ぬ。宜しく之が對策を講じて此の禍害をして成るべく狭小ならしめ、陰忍自重して回春の時期を待たねばならぬ。即ち換言すれば、我國は今や經濟上の破産國たらんとしてゐるのである、愚圖々々して居ると國家の運命にも關はる大切なる切迫の時期である、されば吾人國民は此際放心して居てはならぬ、又漫に體面じや面目じやといつて、外形を装ひ或は高く止まつて澄して居るべき時でもない、之を譬へて言へば、既に臺所へまで火の付いて居る焦眉の急場といはねばならぬ。されば貴婦人として有閑階級として、髪容や化粧などに浮身をやつして居らるべき時ではない上下貴賤一同が、尻からげをして一生懸命になつて立ち働くべき時である、然らざれば此の燎原の勢ある大火は容易に消し止めらるべくもない、かゝる時血氣旺盛の青





日本精神と修養  
年などが、何として安閑として居られやうぞや。

### 刻下の二大覺悟

されば、今日は國民精神作興詔書に仰せ出されたる如く、實に銳意して、文化の紹復と國力の振興とに向つて、努力せねばならぬ緊切な時期である、即ち徒に兄弟内に闘ぐことを止めて、大に上下協戮して振作し更張すべき臥薪嘗膽の秋である、これが即ち政府當局に於ても専ら財政上に緊縮方針を取つて進みつゝある所以である、されば民間もよく之に呼應して内に勤儉を守りつゝ而も大に活動し、自己保存に懸命なると同時に、多少なりとも國家社會の進運に貢献することを所期せねばならぬ所以である。そこで予輩は思ふ、今日は詔書中の御文字なる恭儉勤敏と醇厚中正とを國民刻下の二大標的として大に躍進すべき覺悟を要するのであると。言ふまでもなく、恭儉勤



敏にして始めてよく浮華放縱を斥け得る、而して醇厚中正にして始めてよく輕佻詭激を矯め得るのである、實に之を措いて今の時他に進むべき道はない。之が即ち此の點に就いて予輩の大に説く所あらんとする所以である。

### 恭儉勤敏とは何ぞや

畏くも精神作興詔書中に「入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ」と垂示されてある之が即ち國民上下の第一に心得て置かねばならぬ所であつて、而も日々夜々に拳々服膺して必ず實行せねばならぬ所と思ふ。蓋し一家の集まつたものが一國であつて、家が富まねば國の榮へる道理はなく、國が榮へるのでなくては、復興々々と徒に騒いだとて追付くものではない、そこで吾人は今の時、どこまでも従前に比して、一層勤勉であらねばならぬ、然し其の勤勉努力もよく時代に應じ、機會に乗じて敏活に動く所





がなくてはならぬ。之が即ち勤敏と仰せ出されたる所以と拜察する。然し其の勤敏とて、正義で公平で、又誠實でなければならぬ、人を押除けても他を蹴飛ばしても、自分さへよければよいといふ活動であつては何にもならぬ、何故なれば、それは人道に反して到底永續すべくもなく、又決して成功を収むる所以の道でないからである。果して然らば其の正義、公平、誠實は何から湧いて出るかといふに、それは言ふまでもなく、自己を虚うして恭々しく、他に對して自然禮讓であるやうにせねばならぬ。又かくすることに依て、自己を始め一家一門よく禮義を守り、而して其處に自然に儉素の徳が養はれるからである、古語にも「家長、禮を知れば男女儉を勤む、衰門と雖も亦必ず興るあり、其の一時の貧福は論ずるに足らず」とさへ説かれて居るので判る、之は必ずや古人の實地經驗上より得たる教訓で、一家の主人主婦が恭讓でなければ、そこに他に對する正義も公平も、誠實も行はるゝの餘地なく、而して家族にして



も儉素を奉ずるに至らぬことを説明したものであらう。又古語には進んで「一家、讓なれば、一國讓に興る」と示して居るのであつて、即ち一家の恭儉勤敏が、よく一國を興隆せしめることを説明したものに外ならぬ、之も亦古人の實地經驗に基けるもので、後世國民の大に注意すべき格言金句たるを失はぬのである。

### 人の三不祥

一體に恭といつて、ちや／＼しくして、へり下るといふ徳義は、自己と他人との兩方に對する務めであつて、此の徳義を守れば、必ずや自己を過またず、而して他よりは好感を以て迎へらるゝのである、従つてそこに自然に自己の人格を形造り、而して他人の同情を惹き信用を増すに相違ない。然るを之と反對に、吾人にして日常恭謙でないならば、其の結果は前と正反對に、自己の品性を傷つけ、他の嫌惡を受け、





爲に社會に齒せられぬことに成り行くに相違ない、古語に、  
 人に三不祥あり、幼にして背て長に事へず、賤くして背て貴に事へず、不肖にして背て賢に事へず。是れ人の三不祥なり。  
 とあるのが其の證で、全く之を言ひ表はしたものであらう。然るに古へより今日に至るまで、兎角此の三不祥が實行せられ勝ちであつて、殊に今日は四民同權の世の中なり、杯といつて、權利の履み違へをして、長者を侮り、貴者を敬はず、別して賢者に教を乞ふことを敢てしない傾きがある。之は飛んだ心得違といふもので、かくては決して立身出世の見込はなく、又事業の盛大を來すことを得ないのである。

### 才女千代の恭謙

之に就て面白い逸話がある、かの有名なる俳人加賀の千代女が、一日某侯の召に應



じて席上に書畫を成したことがある、其の時同席へ侯自ら出向はれたから、千代は恭々しく平伏した、それを見て侯には、「イヤそれには及ばぬ、頭を上げて書くがよい」と仰せられた所、彼女は直ちに百合の花の繪を畫き、其の上に、

うつむくは其おきてなり百合の花

と書き付けたから、之を見て侯を始め、近臣一同其の英才に感じ、且は其の謙讓の心得深きを稱歎したといふことである、思ふに後世にまでも其の名を残す程の者は、其の平生の心構へが、全く凡人とは一頭地を拙いて居る、之が彼の成功した所以に相違ない。

### 高橋小十郎の辭世

今一つ面白い逸話がある、舊幕の頃、御賄六尺に高橋小十郎といふ者があつて、





文政三年七月十日に、六十一歳を以て病死したが、彼は末期に殊勝なる辭世を遺した。

あふむくな、こぞんで歩け、つまづくな

裏道行くな、本道を行け。

そなたもさう思はつしやれ、富にもいふて下され、  
物事はひかへてしやれ、出過ぎるな

引くに引かれぬ義理と浮世じや。

これが肝心じや。

此のそなたといつたのは妻を指し、富といつたのは、俸富五郎を指したものであつた、何とよく悟つたもので、又よく世の義理人情を辨へたものではないか、而して特に恭謙の必要なることを力説して居る所に、彼の平生の心掛を認むべきである。



思ふに世の中には、禮讓を守るといふことを、何だか卑屈であるやうに考へ、又無作法であることを、磊落豪氣の事と誤解して、誠に頭の高いものがあり、空威張する者があるが、是等は鼻摘みの代物である、かの三浦梅園の語に、  
學問は置き所によつて善悪分る、膺の下よし、鼻の先わるし。  
とあるのは、世の學弊を痛罵したものであるが、移して世上無禮者の頂門の一針とすること出来る、兎角何時の代にも、智慧を鼻の先にぶら下げて、高慢の態度に出る者の少からぬのは、實に歎はしい次第で、今後の國民特に青少年などの、大に反省して此の弊に陥らぬやうに慎まねばならぬところである。

### 國家より觀たる勤勉

更に少しく國家的見地より勤儉の必要を一瞥することゝしやう。蓋し今の時は我が





國民上下が、一齊に力を協せて勤儉を實行すべき秋であるが、然し勤儉などいふと、多くは自分一人、自身一家のみを幸福にする事なりと速了するのである。然し方今の時勢はそんな小さな見であつてはいかぬ。否な國家の富を成すものは、個人の貯蓄に因るのであり、之に反して國家の貧弱を來すのは、個人の浪費に基づくものなるを知つた以上、勤儉といふことの、如何に公人として必要であるかを了解し、而して社會衆人よりは、克く勤儉なる人を以て、公共的恩人として尊敬し、之と反對に妄りに浪費する者を目して、社會の公敵として憎んでも仕方がないことを知了せねばならぬ、乃ちかゝる意味に於て、我が國民は今日勤儉の二字を嚴守し、進んで之を實行する所がなくてはならぬのである。

### 古偉人と國家的勤勉

古への所謂偉人は、少くとも此等の觀念を有して居た、殊に戰國時代に當り國亂を戡定して漸次に己が領土を擴張せんと欲した英雄豪傑の如きは、夙に富國強兵の精神より勤儉を實行した。又近世太平の代に在りても、己が封境の民を安んじ國內の殷富を圖つた諸侯伯の如きは、是亦勤儉を躬行實踐したものである。此等の詳細は嘗て拙著なる「偉人と其の生活」に於て述べて置いたから、茲には省略するが、其の一二の例として毎度引合に出す徳川家康が三河在國中に麥飯を喫た話や、或は織田信長より送れる師走の桃を食はなかつた話、或は豪者を以て誣はれた豊臣秀吉すら其の精神は富國強兵に在つたから、成功後も此等の點に注意し、高野登山の時、料理番の差出せる割粥に就て、其の手春であるを聞き、かゝる贅澤は向後すべからずと深く戒めたといふ逸話の如きは、如何に彼等が居常勤儉を實行して、其の國を富まし其の食を足し而して社會的勢力を扶植して、終によく向上發展の素地を作つたものなるかを了解







日本精神と修養  
せらるゝのである。

### 勤儉の實行と節制の必要

所で此の勤儉を實行するといふことは、人生至難の事であつて、これほど言ふに易くして行ふに難いものはない、それといふのも、人は元來虚榮心の強いものであつて又入らぬ瘦我慢をしたがるものである、それが爲に他人の衣食住の華美贅澤を見てはツイそれを真似て見たくもなり、彼奴のする程の事は、乃公にだつて出来ぬ事はない位に取りのぼせて、入らぬ心配苦勞の種を蒔く、而して結局は其の身を毀ち其の家を傷ふこととなるのである。要するにこれ皆節制といふ心得がないからであつて、其の程よきを制するといふ點即ち中庸といふものを擧へることが出来ないからである。今少しく古聖賢の言を引用して置かう。蓋し吾人にして之を熟讀玩味すれば、成程、治



家處世は勿論、國家社會の公人としての面目を保つ上に、参考となる點が多いのである。

- 天下の理は其の初め甚だ予が心に快きものあれば、其れ傷ふ事あり、終りに傷ふ事なきものを求むれば、則ち初めより吾が心に快きものを望むことなかれ。(張文潛)
  - 夫れ儉なれば則ち欲寡し、物に役せられず、以て直達して行くべし。(司馬温公)
  - 人は欲なきこと能はず、然れども當さに以て之を制する所あるべし、以て之を制することなく、而して唯だ欲これ從へば、則ち人道廢れて禽獸に入らん、道を以て欲を制すれば、則ち能く命に順ふ。(程子)
  - 思を少くして以て神を養ひ、慾を少くして以て精を養ひ、勞を少くして以て力を養ひ、言を少くして以て氣を養ふ。(張南軒)
- これ皆節制の必要を説くものであつて、而も此の節制こそ勤儉を實行するの根據なる





ことを忘れてはならぬ。

### 勤儉の齋らす美德

蓋し勤儉といふことは、今日の語を以てすれば、自己的放恣を制するの謂であつて之を實行することによつて、忍耐、克己、節制等の美德が、自然に其の間に生起して來るのである、而して之が爲に己が身體を強健にし、己が意志を強固にし、又進んでは他人の信用を増し、社會的地位を高むるといふ好結果を齋らすものである。

されば勤儉は何人も實行せねばならぬ所であつて、或者の如きは、之を至難の業とするけれども、實際之を實行するには、何も大した勇氣も入らず、拔群なる知識の必要もなく、又人に超えたる才徳を要するものでもない、唯だ單に常識と、自己の快樂に抵抗する力さへあればそれでよいので、これほど容易なものはないと、先哲は説明



して居る。

成程勤儉といふことは、一考して見れば、吾人の日々の勞働行爲に於ける單純なる常識であつて、唯だ僅少なる忍耐と克己以外には、決して熱誠なる決斷力を要する程のものではない。それ故に古來、無智無學の人が、却つて多く之を實行し、一代の成功を告げてゐる、西哲の言に「麥酒の一杯、煙草の少量の如き、肉體的利己的なる快樂を節減するといふ結果は、數年にして何物をか貯蓄せしむるに至らう、即ち一日一杯のビール代は、一年にして二十圓に上り、此の總額は一千圓の生命保険料を拂はしめることが出来るのである」と示して居るのは、誠に尤もなる精算と思はれるのである。これも要するに節制の必要を具體的に力説せるものであつて、精神作興の詔書に「節制ヲ尙ヒ」といふ御文字を拜見するに至つた所以と思はるゝのである。



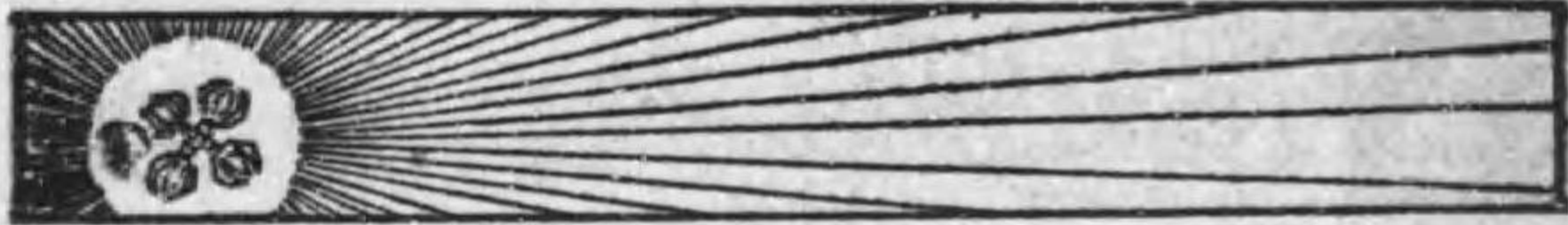


### 勤儉の効果と健康長壽

勤儉の効果は、それよりも吾人の最も要求して止まぬ所の、健康長壽を齎らすものである、されば何人も實際上、我身の爲め我家の爲め、延いては國家社會の爲と思ふて、日々之を實行する所がなくてはならぬ。前掲の張南軒の言の如く、節制によつて神を養ひ、精を養ひ、力を養ひ、氣を養ひ得るのであるから、かくて長壽を得ぬ筈はない。貝原益軒も此の點に關して左の如く述べてゐる。

養生の術は多言を用ひず、只だ是れ飲食を節し、嗜欲を寡くし、七情を正し、六氣を防ぎ、心を平かにし、氣を和らげ、言を寡くし、事を省き、起居を慎み、時々動靜する、此の如きのみ。

如何にも天下の至言であつて、古今東西に論なく、養生の道は之より外にはない。



昔し京都嵯峨天龍寺の開祖夢想國師疎石は、長生訣を吾人に遺された。其の壁書に曰く、

人は長壽せんと思はゞ、嘘を言ふべからず、嘘は心を遣ひて、少しのことにも心氣勞せり、人は心氣さへ勞せされば、命長きこと疑ふべからず。

又、鐵拐仙人の圖に贊して曰く、

仙人は不養生せず、腹立てず、物ほしからず、それで長生。

と、寸言隻語、よく此の一大事を道破し説明し盡されて居る。即ち節制の齎らす眞の勤儉はかくてよく人を富まし國を富まし、尙ほ健康長壽ならしめて、人世の幸福を増進するのである、されば此の道徳を實行することに依て、始めてよく國家社會の進運を裨補するのであるから、復興國民は宜しく之を三思して日々夜々に實行すべきことである。





### 公民道德の根據

第二に醇厚中正の道として吾人は社會に對する任務を十分に知得する所がなくてはならぬ。よく今日の語には「縦の道德」といひ「横の道德」といふ説明を聞くのであるが、縦の道德とは、言ふまでもなく長上に對する道德で、人倫五常の道は此の道德を修する所に因て實現されるのである、而して横の道德はこれ即ち共同生活に對する道德である。即ち之を行ふ所に依て、國家社會の隆盛繁榮は期待せられるのである、而してこれが所謂公民としての道德である。

元來、公民には個人自己に自治の能力があつて、始めて己れを高め、自家を富まし得るのである、而してそれが社會共同の生活と交渉を有することに於て、そこに始めて公益を進め世務を開き、以て國家社會の進歩發達を促がす原動力たり得るのである。



而して公民相互がよく社會と自己との關係を自覺して、自律自制することに依て、共同生活の眞善美に到達し得らるゝのである、之は今の時勢に處する者の、何人も略々承知して居る所であり、又了解し切つて居る所であらうが、兎角は理窟に上すのみにて、實行に遅々たるは何の故であらう乎。

### 共同生活と日夕の訓練

こゝが即ち問題です、我が日本人には由來、縦の道德は多年養成せられて、見事な發達を示してゐるけれども、横の道德の方は、之に比してどうも未だくゝ涵養が足りない。それ故に共同生活といふ點にかけては不十分勝ちである。かくては醇厚の俗といふものは、今後維持することは甚だ覺束ない。特に今日の場合に於て、此の缺陷が、我國をして各地到る處に割據孤立といふ如き變な状態を呈せしめて、爲に國力の

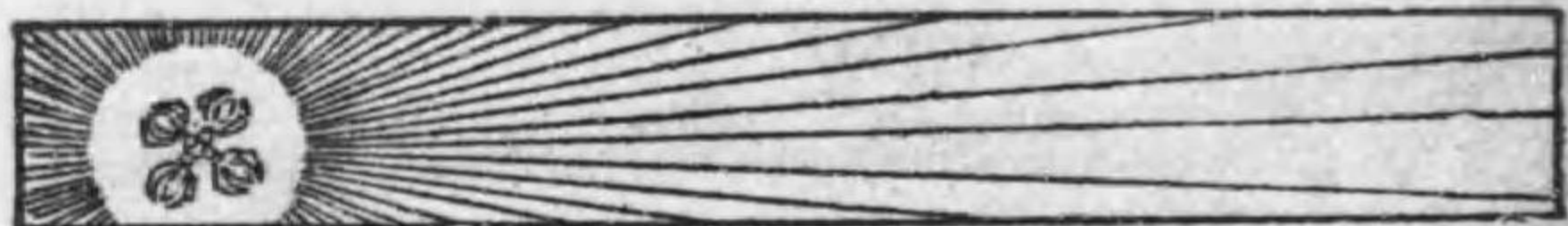




充實といふ點に妨害をして居る點を發見せらるゝのである。  
 予輩は震災後、多く地方を巡遊したが、各地邊僻の境に入る程、此の横の道德の涵養が足りないことを痛感する、之はどうしても今後、教育家や宗教家の力を借りて、政府當局と協力一致して、此の道德の涵養を十分ならしめねばならぬと思ふて居る。而して之を實際上に日夕訓練するといふことが、今後は一層必要なりと信ずるのである。即ち日夕の訓練これが今後に切實で、其の青少年に須つ所多きや言を待たない所である。

### 上下協戮の時機

地方青年會や青年團、婦人會、商工團、農民團といふ公共團體が、今や我國到處に設置され組織せられて、致々として横の道德即ち公民道德の涵養訓練を勉めて居る



やうであるが、然し眞に此の精神が會得せられず、又其の必要が十分了解されて居ないのでないかと危ぶまれる、所謂入らぬ事に争論をしたり、喧嘩の種を蒔いたり、多くは舊來の因襲に捉へられて、どうも町内や村落が、互に割據を好み孤立を喜び、所謂獨り占めの獨りよい子にならうとする如き傾向が、今尙ほ隨處に發見せらるゝのである、即ち詔書に仰せられたる上下協戮といふことが、此に於て一層切實緊要の條件なりと感ぜらるゝのである。

### 旅客根性の譬喩

茲に昔話がある。嘗て或る旅客が一旗亭に宿つた。偶々深夜其の地に火事が起つて、半鐘がジャン／＼と鳴る。宿屋の給仕人は驚き騒いで、其の旅客の部屋を叩き、「早く起きて下さい、町の角から出火して居ます」といふと、旅客はア一と仰して目





を覺ましたながら、「何だ火事だ、マア隣家まで焼けて来るまで起して呉れるな、眠い  
く」といつたといふ、之は他人行儀といふ我れ關せず焉の旅客根性から起つた言辭  
であるが、我が邦人にはまだ此の旅客根性がとれて居ないのではないか、兎角は同  
情もなければ親切もない、況んや共同生活の必要をやであると、かやうにも感ぜらる  
るのである。

### 社會に對する任務

自己保存の必要を知る者は、同時に自己犠牲といふことの必要を解せなくてはなら  
ない、所謂「人の爲は吾が爲」といふのは此處のことで、吾人は共同生活に依てこそ  
其の生を保ち其の家を續け得るのであるから、こゝをよく了解して、出来るだけ國家  
社會の安寧幸福を増進するやうに努力する所がなければならぬ、而して一には我が爲



であり、同時に人の爲になる所の相互扶助といふことを、進んで積極的に盡すやうに  
勉めねばならぬ。昔のやうに唯だ何となく、習慣的に隣保郷黨が和睦して言葉をは  
し、或る災難に逢着せる際だけ、其の辛苦をいたはり合ふといふ如き、消極的の親し  
みだけでは物足りない。今後は須らく社會進歩の爲に、上下一致して協心戮力して、  
諸種の機關を設け、團體を作り、事業を起して、共に萬遍に洩れなく、人生の幸福を  
分け前するやうに盡す所がなくてはならぬのである。而して或場合には、自己の利益  
を犠牲に供してまでも、進んで國家社會の爲め、隣保郷黨の爲に盡力するやうに心掛  
けねばならぬ、之が即ち吾人の社會に對する任務に外ならぬのである。而して社會奉  
仕の眞意義も此處に全く其の根據を有するものである。

### 中正の道と共同生活





醇厚の風俗は我國の美點でもあり一種の誇りでもある。蓋し同一民族に依りて團結されたる此の社會が、殆んど三千年に近き期間も、萬世一系の皇室を奉戴してよく此の國家を維持して來たといふことは、自然に醇厚の俗を其の間に醸成したものに相違ない。然し人情は兎角極端に流れ易いものであるから、何時とはなしに、近時は人の心が左傾して、唯だ利己主義、個人主義の自己保存にのみ楯籠り、全く横の道徳の必要を忘れ、且つ縦の道徳をすら廢頓せしめつゝあるのである。かくては醇厚の美俗は遂に破壊せられずには措くまい。今日の我が農村が、昔日の如く盲く治まつて行かないのは、全く人心が左傾して、自己保存にのみ執着するに至つた結果である、どうか「人もよかれ己れもよかれ」といふ温みや、「人の爲は即ち我が爲なり」「情けは人の爲ならず」とかいふ如き、同情博愛の心を根據として、而して自己保存と共に自己犠牲といふ點にも力を盡し、かくて此の世をして、出来るだけ及ぶ限りの樂士として



欲しいものである。生活上の不安定が今では年々純朴なりし人心を荒廢せしめるのであらうから、地方町村にありては、及ぶだけの設備を爲し、機關を設け事業を起して相互扶助の共同生活を營み、和氣霽々裡に、己が業務を勵みつゝ、其の生を安らげく送り行くやうになりたいものである、思ふに中正の道とはかゝる状態をいふのであらう。要するに今日は眞劍に國家社會の爲め、將又鄉村の爲に考慮を費すべき時であつて、たと漫然と舊慣を墨守するに止まつてはならないのである。

## 第二章 貧富と成功

### 貧富優劣論





昔、或貧乏人が金持の隠居をへこまさんとて、一日訪問して辯ずらく、  
 第一、財寶を持つから、盜賊の心配がある。第二、家を持つから火災の心配がある  
 第三、金があればこそ物價の高低に心を傷める、所が之がなかつて見れば、「無い  
 が増しかよ氣が樂な」で、盜賊の心配も火災の苦勞も、物價の高低も少しも念とする  
 に及ばぬ、それを世間の有象無象共が、金が欲しいくと騒ぐのは、畢竟馬鹿とい  
 ふもの、さうでは御座らぬか。  
 と。其の時隠居は黙つて聽いて居たが、辨舌が終るを待ち悠然と答ふらく、  
 それは一面の眞理じやが、所謂一を知て二を知らぬといふもの、貧乏人には貧乏人の  
 安心がある如く、富者にも富者の満足がある。それは其の地位になつて見ねば味  
 ひは別らぬ、されば貴殿の御論は、譬へれば、醜女の品行論、乞食の斷食論と一處  
 で御座らう。



と、かく一本參つたから、流石の議論家も避易して、匆々逃げ出したと古い書物に出  
 てゐる。  
 成程、醜女には手の出し手はない、手を出せるだけの資格がないからで、若し手  
 を出すならば、どこか醜女ならぬ取柄があるからである。それを醜女にして若し高慢  
 ちきに、「妾は品行方正なり、何人にも一指を染めしめず」などといった所で、天下  
 之を笑はぬ者はなからう。又乞食の斷食にしても同様である、「オレは昨日來、食物  
 を攝取せぬ、然もそれで生きて居る、エライ者であらう、諸君以て如何と爲す」とい  
 つたのでは、天下また一笑に付せぬ者はなからう。此の如くに、資格なき者が資格あ  
 る者を笑ふのは、却つて他の嘲笑を招く道理に相違ない、して見ると、貧乏人の安心  
 のみが、未だ完全の眞理ではない。





### 金持の楽しい時期

かく金持の提灯を持つて見るものの、一體、金持の愉快幸福といふものは、努力して之を溜めやうとする間にあるのではないか、貧と戦ひつ、悪戦苦闘して漸次に之に打克つ、此の活動期が第一に楽しいのであらう。次に又一切の嗜欲を制しつ、將來の獨立を期し、それが爲に用を節し財を貯へんとする、其の期間が楽しいのであらう、更に日々パンの爲に働きながらも、精神の修養を怠らず、知識及び徳性の涵養に力を致すとあらば、其人は、一層楽しい事であらう。そして又其の家庭をより幸福にし、より大にして彌が上にも世に有益ならんと心掛くるに於ては、其の時期が本當に楽しいのではなからうか。

歐米の進歩したる富者は、眞に此の多くの樂みを味ひつゝ、幸福に愉快に活動を續



けて居るのである。乃ち其處に富者の價値がある。ロツクフェラーでもカーネギーでも、其處に彼の奮闘があり、幸福があり、寄與貢獻がある。即ち富を求むるの目的も明瞭で、富者たるの面目も立ち、而して富者の價値をも認め得るのである。之が果して我國の富者にある乎、第一の活動期と第二の制慾期間はあらうが、第三、第四の方になると、どうも覺束ない。東京や大阪といふ大都會に其人があるか、一寸疑問である。然し行く／＼は必ずかくなつて行かなければならぬ。

### 金持の悟り

西哲ゼレミー、テーラーの言にいふ、「世の富豪、吝嗇家及び世人は、死後に至つて、彼は金満家になつて死んだと批評せられた時に、始めて其の節儉に對する惡報酬であつたことを悟るであらう。然し彼の財産は、地下に於て彼を益する所もなく、唯





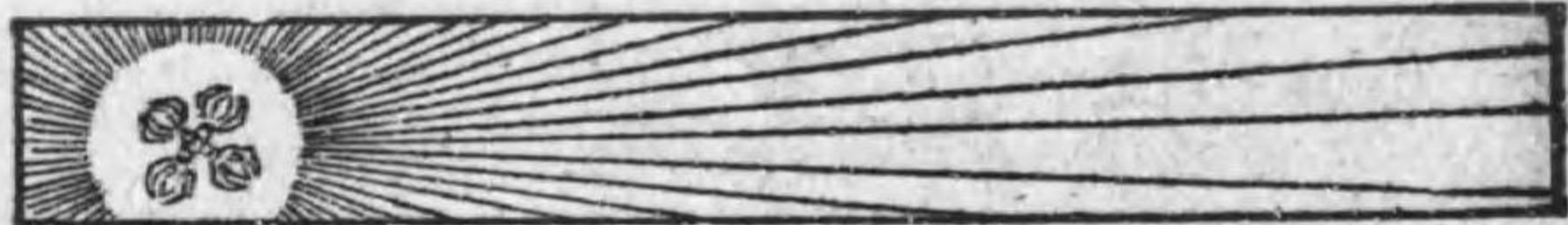
だ彼の最後を著しく不幸ならしめたに過ぎない」と、恐らく之は歐米諸國でも、數多き吝嗇家、金持、又は金持にならんとのみ離脱とした者に對する警告であらう。眞に金持即ち富者たるの價値を發揮すること、前上に述べた如くでなければ、彼等は此の評言を甘受せねばなるまい。而して自分も寢覺めのよいものでなく、又眞に幸福を得て、此の世を樂しく送つたとはいへないであらう。我國の俗歌にも、

金持ちて冷たうなりし人よりも  
無事にてくらす身こそ安けれ

といふのががあるが、同様に此の吝嗇漢を嘲つたものに相違ない。

### 貝原益軒の名言

嘗て今より十四五年前に、貝原益軒先生の名著「慎思録」を譯解して世に公けにし



たことがある。書中に名言頗る多きを認めたが、就中、左の言の如きは、富者の最もよく心得置くべきものである。其の言に曰く、

君子は其の財を棄て、貧窮を救ふ者、其の財を惜まざるにあらず、其の財を愛むこと甚だしくして、之を徳義に用ひんご欲するなり。故に能く貧窮を賑恤する者は、其の平日財を用ふるを視るに、必ず儉約して妄りに費さざるの士なり。貧窮を救ふこと能はざる者は、必ず驕奢にして妄りに費すの人なり。

財は是れ天地生ずる所の物、民を養ふの具、而して其の生ずる所限りあり、妄りに費すべからず。凡そ其の志、驕奢にして妄りに費耗する者は、必ず貧窮を救ふこと能はず。蓋し彼に重きものは、此に輕きは、其の常此の如し、必然の理なり。

如何にも名言ではないか。金は決して妄りに費してはならぬ、それは其の金を以て有益に使はんが爲に積むものゆゑである。唯だ積んで置くだけであれば、前に述べた如





く、死後の悔を貽すだけに止まるのである。然るを積んで置くだけではなく、之を己が一身一家の榮耀贅澤にのみ費消することを事とし、それを以て驕奢の一生を送り、以て人生の能事了れる如く思ふ者は、全く財の用を知らぬ者であり、人生の幸福を知らぬものであり、而して、社会人としての義務を解せぬものであり、未來永劫浮ばれぬ種類の人である、そんな人は最早此の世にはあるまいが、どうか我が國民は今後一層、益軒先生の言を服膺して貰ひたいものである。それが眞に現代人として生きる所以であり、而して諸君の口癖とせらるゝ社会奉仕なる眞の務めであるからである。

### 西哲の箴言

西哲ジャン、ラスキンの言に左の如きがある、思ふに、方今は物質的より見た階級は撤廢せられたけれども、精神的なる階級は、自然に諸方面に存して居るのが浮世の



常である。之も其の一であらう。曰く、人類に三階級あり、下は鄙吝にして利己的に、何の見る所なく、何の感ずる所なし中は高尚にして同情あれども、他の刺戟なければ、何の見る所なく何の感ずる所なし、上は一たび心を決すれば、眼中物なく、事に臨んで己れあることを忘る。と、希くは、此の上の部に属する人の、多く我國に輩出せんことを、又希臘の詩人メナンドーの「富める心」に曰く、己れのみ爲に生くるは、眞に生くるものといふべからず、聖き事を爲すときは、喜び勇め、正しき勇氣には、神自ら加勢し給ふと知らずや、富める心こそ、實に人の求むる至寶なれ。と。此の富める心ある人となつてこそ、吾人は全く生き甲斐がある、而して神佛も必ずやかゝる人を守護し給ふて、眞に幸福の一生を送らせ給ふのである。

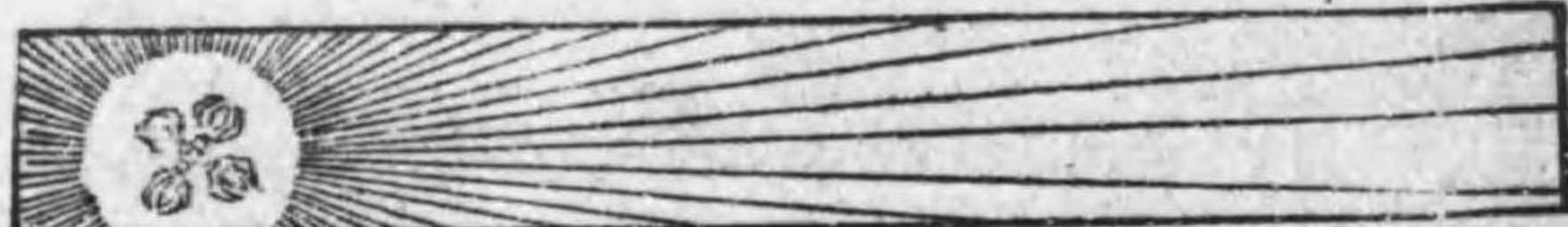




### 徒然草の一節

翻つて之を我が古賢の言に探るに、有名なる兼好法師の徒然草にも、左の如き訓言が出て居る。富者に對する警告は必ずしも西哲の獨占ではない。曰く、抑々人は所願を成ぜんが爲に財をもとむ、錢を財とすることは、願をかなふるが故なり、所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらんは、全く貧者と同じ、何をか樂みとせん。此のおきては、たゞ人間の望みを断ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂みとせんよりは、如かじ財なからんには、癩疽を病む者、水に洗ひて樂みとせんよりは、病まざらんには如かじ、こゝに至りては、貧富わく所なく究竟は理即にひとし、大欲は無欲に似たり。

と、旨いかな言や、思ふに吉田の兼好法師も、世の所謂大福長者が、兎角人間の慾望



を断絶して、金をのみ貯藏せんとする心理を観察して、此の如きは、畢竟貧者と同じ境界を歩んでゐるもので、かくては貧富何等擇ぶ所はない、須らく金の用を知れと、私かに世を諷し人を導かんとしたものに相違ない。

### 金が人を持つ状態

更に今少しく貧富兩者の關係に就いて、社會的の觀察を下して見やう。西人の評してゐるやうに今日は、「人が金を持つてゐるのでなくして、金が人を持つてゐる状態」である。金其物を人が尋常の機械に對するやうに、之を自由に利巧に使ふなれば其の金は人類に對して、諸種の利益幸福を齎らすであらう。然るに今日にては、人は金を以て、神か佛のやうに崇め奉つて、其の前に拜跪してゐる、而して此の崇拜物を獲得せんが爲に、卑劣、醜陋、不義、不徳のあらん限りを盡しても、恬として恥ぢざ





日本精神と修養 一四八

る者が多い、之は畢竟、金其物の性質を知らぬからである、否な人其物が金よりも貴いことを知らぬからである。而してそこに人格の有無は評價されるのである。

### 貧富は比較的話し

かゝる幼稚、盲目の誤解からして、多くの世人は、「所持してゐる金の多寡に依て人々の階級を定めるといふやうな淺幕な哀れな了見」を抱いてゐる。之は人を侮辱するを甚だしいはねばならぬ。そこで西哲も之に就いて語つてゐる。

一體、貧乏人とは如何なる者をいふのであるか。又金持とは、如何なるものをいふのであるか、畢竟之は比較的話に過ぎない。例へば百億萬の富豪が金を減つて數百萬しか残らなくなつたならば、自分はたしかに貧乏人になつたと思ふであらう。之に反して赤貧洗ふが如き貧乏人が、一舉にして百圓を獲たならば、自分は急に大



分限となつたと思ふであらう。かやうな譯で、何事も物は見方に依るものである。貧乏といひ金持といひ、畢竟は吾々の之を観る見地の如何にかゝはつてゐる。と、成程之に相違ない。元來、貧富は比較的のもので、必ずしも其の多寡に關したものではない。假りに多くの金を所持するを富者としても、其の富者が、未だ飽くことを知らなかつたならば、矢張自分は貧乏と思ふてゐるであらう、よく世上の小成金に向つて、「大分近頃は成功をなすつたやうですネ」と聞くと、「イヤどうしまして、迎も三井、岩崎の爪の垢にも及びませぬ、これから一層馬力をかけて働かねばなりませぬ」と。而して眞に精神の修養をしつゝ奮闘努力をすればよいが、多くは之を忘れて、否な知了せずして、唯だ徒に過慮したり、身心の過勞の爲に、思はぬ疾病に罹つたり、或は其の病が幸に癒えて、醫者より尙ほ十分静養を勸告せられて居るにも拘はらず、少しくよくなると、又々金儲けの爲にのみ天々子舞をしてゐる、之は畢竟





するに金を機械と心得ぬ爲のみならず、寧ろ人間が機械となつて、金の神様（間違つた偶像崇拜である）に追ひ使はれて居るのである。天下之より愚なことはないが、今の世の中にはこんな人が到る處に随分ある。

日本精神と修養

一五〇

貧乏も悟るべし

多くの小成金もかく間違つてゐれば、世間の所謂貧乏人も、亦間違つた考を抱いて居る、即ち金を神佛の如くに崇拜する所から、隣人が多少成功したのを見るや嘆いて曰く、「自分はどうも成功せぬ、いつまでも貧乏である、彼は自分より何等優れた男でないのに、兎角、金を持つてゐるに反し、自分は之を持つことが出来ない、ア、詰らないく」と悲歎に暮れて居る、加之、それを残念に思ふ所より、内省し克己する所なく、猥りに他を羨み、嫉妬心を起してゐる、勿論それで金が手に入らずとも、



自身幸福であり得ればよいが、そんな餘計な煩悶勞苦をする所より、一層益々憂鬱性に陥り、悲觀厭世し、而して貧すれば益々鈍することとなるのである。之は恰も渴を療さんとて、鹽を食べる如きものぞと古人も評してゐるが、誠に其の通りである。

さればかゝる場合には、貧者は先づ「金は機械である、之を有功有益に使用せんが爲に、儲けもし、貯蓄もすべきものであるから、唯だ側目も觸らず、忠實に正直に働いて、其の活動をして國家社會に有用有益ならしむると同時に、其の奮闘の報酬として、多少の富を作り得るとすれば、それを積み重ねて、異日の用に供せんのみと、極めて虚心愴懷に世に處すべきことである。さすれば、何も人を羨むことも入らず、他を嫉むの用もない、西哲も之に就いて亦言つて居る。

一體、全體、金持の幸福といひ、貧乏人の幸福といひ、それはどういふものであるか、よく考へて見るべきである、吾々が常に富を感心して居ることは、恰も線香煙

日本精神と修養

一五一





火を感じずるやうなものである、吾々の目が盲いてゐるから、火ノ粉の消えるのも知らずに、之をダイヤモンドの光でも見たやうな迷想を描くのである。と、誠に穿ち得て妙である。世人はかく富其物に對して盲目であつてはならぬ。よく活眼を開いて達観する所がなくてはならぬのである。

### 憫むべき富者

決して憎まれ口をきくのではないが、「富者の不憫」といふ題下に西哲は述べてゐる、即ち富者であるからとて、貧者よりも利巧だといふ譯でもなければ、有徳者だといふ譯でもなく、身體が強健だといふ譯でもなく、又有名になり易い見込があるといふ譯でもない、之を歴史に徴するに、寧ろ反對な事實が證明される、名聲赫々たる人物や、文學界又は政治界に於て、學問に卓越してゐる偉人などは、多くは皆布衣より



起つて來る、アプレウスの言ふ處は實に道理である「總て名聲赫々として、吾人の感歎する者は、皆搖籃の時から貧に養はれた者ばかりである。彼はいつた「貧は古代に於て國を創立し藝術を發明し、惡徳を避け、名聲を博し、萬民の稱讚を受けた、希臘では貧はアリストテイスに於ては仁愛となり、エバミノンダスに於ては武勇となりソクラテイスに於ては賢明となり、ホメロスに於ては名文となつた。羅馬帝國の創立時代に於ても、勢力のあつた者は、皆實に貧であつた、精神の爽快は、吾々の幸福の要件である、然るに此の見地からして「富者ほど不幸なものはない」とペーコンはいつた。蓋し富者には望むべき所のものが少なくて、恐るべきものが多い、即ち健康は吾等の至寶である、然るに富者は身體を強健にするには、貧者のやうな生活を送らなければならぬと、サー、テンプルは述べてゐる、洋の東西を問はず、時の古今を論せず貧は人間界の喬木大樹（偉人）を生ずる特別の地であつた、詩人でも學者でも、藝術





家でも、爲政家でも、其の何人たるを問はず、貴重なる特質美德によつて、其の人格を作り、且つ依て以て之に勝を制せしめることを得たのは、皆貧の賜である」と。以上は實に事實であり眞理であるから、何とも早や仕方がない、貧乏人は聊か以て其の意を強うするに足りるではないか。

日本精神と修養

一五四

### 貧乏と不幸との差

所で此處に一寸注意しなければならぬことは、貧乏といふものと、不幸といふことを、區別せねばならぬ一事である。不幸といふものは、吾人の生活上に、なくてはならぬ所の必要物がない時に、始めて現はれて來るのであるが、之に反して貧乏といふものは、所詮は質素なる生活上の條件であるに過ぎない、されば貧乏であつても吾等は自由に生活することが出来るのであるから、不幸の爲に人格を低下するのとは



大に異なつてゐる。思ふに貧乏であるといふ事と、不幸といふ事とは、理論的には區別し難いが、實は生活上の具體的の事情の結果に過ぎない、即ち平常自分の家族を扶養して、自由に發展させて行く事の出来る人は、貧乏人であつても、決して不幸な人ではない。然しこれ以下になると、始めて不幸といふものが現はれるのである、そこで今日にては、國家にあつても、成るべく此の不幸を緩和せしめんと勉めて居る而して不幸者の救済事業といふものは、今や世界の到る處に開始せられてゐる。けれども世の中の總ての人を、悉く金持にするといふことは固より出來ず、貧乏人があるから金持があり、金持があるから貧乏人が出來るといふ道理であるから、此の循環理法の動かせない限りは、絶對的平等といふことは、迎も望まれない、唯だ比較的極貧者を少數ならしめんと勉めるのみである。かくて世の不幸者は、始めて救はれるのである。

日本精神と修養

一五五





### 金をよく使ふ力

前段に吾人は「金を尋常の機械のやうに思へ」といつた。然し之は決して金を輕視せよといふのではない。世に機械ほど大切なものはない如くに、金といふものも、亦頗る必要なものである。即ち何人でも機械を輕視せずして、之を鄭重に使用する如くに、金其物をも勉めて有功有益に運用すべきである。而して始めて其處に金の價値が生じ、而して人は金に使はれずして、よく金を使ふといふことになるのである。所で、此の金を機械の如くに重要視して、且つ勉めて有功有益に運用する力は何であるかといふに、それは言ふまでもなく、即ち人格の力である。而して先づ第一に自主獨立の人にして、よく金を動かし得る、されば吾人は貧富などいふ比較的の語に捉へられずして、兎に角獨立心を先づ養成せねばならぬ。蓋し此の獨立心は、吾人をし



て偉大ならしめ、又強健ならしめるからである。世俗に所謂「他人の厄介や世話にならぬ人」となり得るからである。而して之と同時に、吾人は己が社會人であるといふことを振返つて、共存共榮の必要を了解して、世に所謂「世の爲め人の爲めに一肌脱ぐ所の、人を世話する者」とならねばならぬ。即ち自己に對しては自主獨立の人たると同時に、他人及び社會に對しては、公共博愛の人とならねばならぬのである。即ち勅語に仰せられた如くに、己が智能を啓發し、徳器を成就して、自己を完成すると同時に、進んで公益を廣め世務を開く人とならねばならぬのである。此の兩者を併せ行ふてこそ、始めて吾人は、己が天職を盡すことを得、而して其の人格を向上し得るのである。

### 事業と産業と冤業

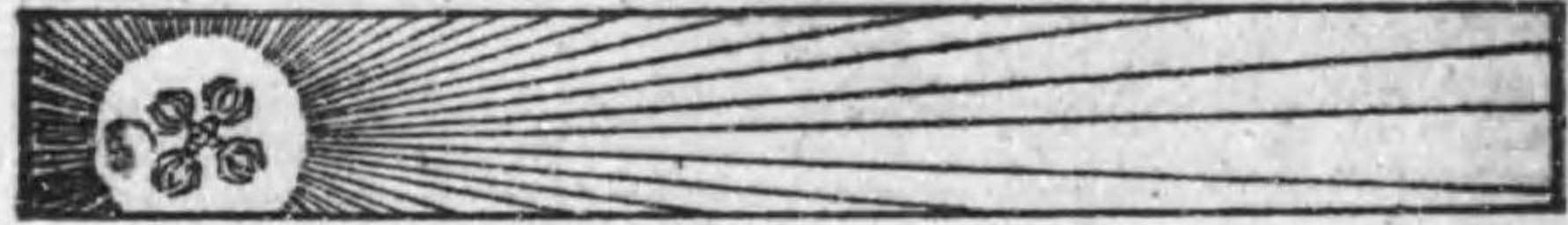




日本精神と修養 一五八  
 西哲の教訓のみならず、東洋の賢哲にありても、古來、社會的見地より、吾人が其の事業職分に對して、平生抱持すべき心地を示してゐる。かの昨非庵鄭瑄の日記にも左の言がある。

氷操

擧げて之を天下の民に措く、之を事業といふ。擧げて之を一家の人に措く、之を産業といふ。擧げて之を天下の民を害し、以て一家の人を利するに措く、之を冤業といふ。産業を以て事業をなせば人之を怨む、産業を以て冤業となせば、天之を殛す此の文中の、事業といひ、産業といふ語は、今日の學術的の語とは大に其の意義を異にして居るけれども、言ふ所の道理は中々に面白い、而して特に冤業といふ文字を引き來つた所に趣味の深いものがある。蓋し自己一家の利害にのみ汲こととして、社會國



家の利害を顧みぬ者は、産業家であつても、決して事業家ではなく、而も自家の利害のみを事として、社會國家を害毒して憚らぬ如き者は、所謂冤業家であつて、前者の人の怨みを受くる位に止まらず、遂には天の戮する所となると斷じてゐるのである、之は誠に痛快の言といはねばならぬ。

貧富共榮の用を知れ

要するに、金を得んといふのは、之を藏めて獨り悦に入らん爲でもなく、之を從者の如くにして、人々に誇らん爲でもない。唯だ之を適度に得て、前に所謂獨立なる光榮を有する特權を獲得せんが爲である。されば貧乏人は清貧に甘んずるとしても、獨立し得るだけの活動を續けて職分を完了し、併せて家族を養ひ、國家社會有用の人となり、而して他人の世話にならぬやうに努力せねばならぬ、之と同じく、富者は幸





運にも、富を穫得したのであるから、金錢を貴重視して、而もよく之を善用する所がなければならぬ。即ち金錢を以て一種の人格者として之を待ち、之が正當なる使用によりて、寛大、恩恵、正義、正直、遠慮等の美德を發揮する所がなくてはならぬ、若し誤まつて、之を不良に使用するときには、貪欲、吝嗇、不正、奢侈、無遠慮等の惡徳の根源なるを恐るゝのである。世に貧富の議論ほど盡きないものはないが、然し之ほど人生に切實なる者はない、古人曰く、

富は貧より出で、終にまた貧に歸す、富には榮落あつて貧には榮落なし、此の理を知りながら、我も人も富を願ひ慕ふ、最も口惜し。

と、今も亦然りである。どうか今後の青年は世の所謂成功の眞意義を了解し、以て富を作り、富を善用して貰ひたいものである。

### 第三章 陰忍の福音

#### 世界的不景氣の襲來

今日は實に不景氣の頂上を窮めつゝある時である。日々新聞紙は世上の生活苦の深刻となりつゝあることを詳細に報道して、日も尙ほ足りない有様である。果して之が頂上であらうか、たとへば富士山に登るには六合目、七合目と登攀毎に喘ぎ苦みつゝ漸くにして絶頂に達し得る如くに、今日の不景氣は頂上を望んで喘ぎ登りつゝあるものの、未だ絶頂に達したといふのではあるまい。何故なれば今日の不景氣は獨り我國のみの不景氣でないからである。思へ歐洲の文明は過去數百年間を積み上げて輒近に至つたものを、數年間の大戦に依てスツカリ破壊して了つたのではないか、







而して英獨佛といはるゝ強國すら今は借金キョウキョウの整理セイリにのみ没頭モツトウしてゐる、ドース案オース案の承認オウジに依よつて漸シトシトく獨逸覆滅ドクイフツツの危急ウキウツを救すくはれたといふ舌シタの下したから、戰勝國センショウクの佛國フツクは反へつて戰費センヒの借財キョウサイに苦くるみつゝ英國エイグと交渉コウシャウを重ね、今尙ほ數十年賦償却スウジヤウキョクの接衝セツショウ中で、モラトリアムモラトリアムの御蔭ゴウインに僅わずかかに氣息キソクをついて居る有様アリさまではないか、何なにしろ數年間の大闘争ダイトウソウにアハレ數千萬億スウゼンマンイッパクの財貨サイカを使つかひ盡つくして敵も味方も共斃トモトモれの有様アリさまとなつたのであるから、財界サイカイの景氣ケイキの悪い事は勿論もちろんである。而して我國わがくにも此この交戰かうせんに仲間入りなかにいりしたのであり、且かつや今日こんにちは經濟上けいぎじやう殆たいていど世界共通せかいきゆうつうの事情じじやうの下したにあるから、其餘波そのよはを喰くつただけでも不景氣ふけいきの襲來しやうらいは當然たうぜんである、況いはんや加ふるに思おもひもよらぬ大震だいしん大火たいかを被かつたをやである。されば不景氣ふけいきといふ聲こゑは茲何年こゝろなんねんかスツカリ跡あとを絶たつことはあるまい、唯ただ年數ねんすうの豊凶ほうきゆうに依よつて左右さうざうせらるゝ我が財界さいがいは、今年ことしの豊年ほうねんに依より、僅わずかかに息いきをつき得うるといふまでに過ぎない。之これぞ所謂いはゆる世界的不景氣せかいじけいきである、世俗せぞくの語ごを以もつてすれば自然じぜんに循環じゆんくわんし來きたり



たる天あまの下したせる冬期とうきの霜枯月しもがれつきである。然しかし冬ふゆは何時いつまでも冬ふゆであり得うるものではない何時いつしか春はるは芽めざして來くる。そこを忍しのんでこそ草木くさきも榮さかふる、人も亦また此こゝろの如ごとくならねばならぬ、即すなはち今日こんにちの日本人にほんじんも、其そのの不景氣ふけいきに泣なくよりも、よく之これを耐たへ忍しのぶべきである、そこに所謂いはゆる陰忍いんにんの福音ふく音をは生うじ來くるのである、古歌こたにいふ、

世よはなべてうるふ木の芽めの春はるをまつ

柳やなぎや染ぞむる色いろに見みすらん

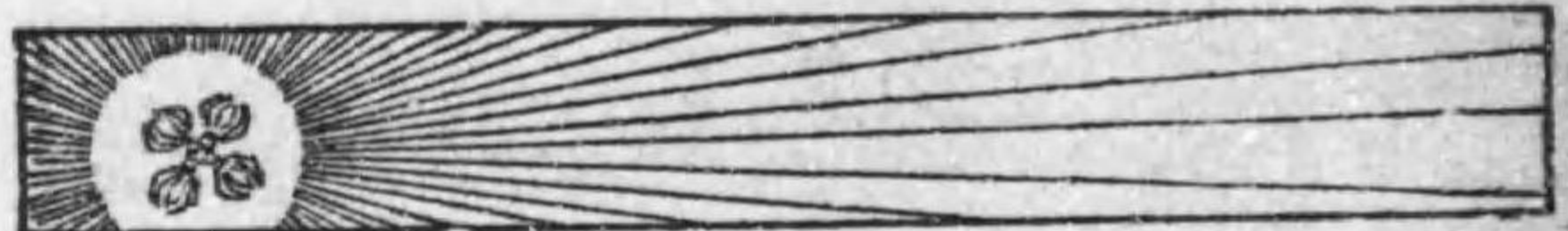
吾人われは柳やなぎの如ごとくに、折をれずして、さからはずして回春かへるはるの時ときを待つ外ほかはない、而して徐々じゆんじゆんとして其そのの枝葉えだを復活ふくたつせしむる如ごとくに、陰忍いんにんして時節ときせつの到來たうらいを希望きぼうして居ゐるべきである、之これは至難いたん至艱いたんの事ことであるが、所謂いはゆる運命うんめいなれば仕方しかたもあるまい。

### 嚴冬の教訓





そこで霜枯月なる冬期に於ける古人の教訓を回顧して見やう、貝原益軒曰く、天道は、春は生じ夏は長じ秋はをさむ。三時は皆事あり、冬はたゞ生氣の隠れしづまるまでにて、しわざなし、夜ふけて人のねいりたる時、無事にしてやすむが如し冬の氣閉藏するは、即ち是れ來春發生の本なり、冬寒氣はげしくして、陽氣をさまざまり隠るれば、來春の陽氣さかんなり、故に冬あたゝかに雷なりて陽氣うごきもるれば、來春の發生氣よわく、秋穀の實のりも薄し、人、夜半ののち寝ねざれば、血氣しづまらずして、明日力よわし、人心も靜かなる時に養ひて、動の本とすべし。心しづかならず、動きさわげば、業をつとむるに力なく、迷ひてあやまり多し。蓋し冬は嚴寒にして耐へ難く、人として最も苦痛を感じる時である、さればこそ虛弱者や老衰者の死滅するは、多く此の時期に於て實現せらるゝのである。然しながら此の苦痛を耐へ忍び得る者にして、始めてよく陽春の恩恵を享受せらるゝ。されば吾人



は其の男女老若を問はず、それづくに須らく嚴冬の苦寒に耐へ得る工夫を凝さねばならぬ。之と同じく吾人處世上の艱苦に對しても、亦よく之を凌ぎ、之に打克ちて其の運命を開拓するの工夫を講究せねばならぬ。即ち今の時は政府の緊縮方針を是認してどこまでも陰忍し、以て花咲き鳥語ふ春の來るを期待すべきである、此の意味に於て益軒先生の冬の教訓は、極めて味あるを覺ゆる、而して其の説く所は如何にも消極的であるに似て、實は積極的に働きかくる底力を養ふものと見ねばならぬ。所謂靜に居て動の本を養ふ活教訓たるを忘れてはならぬのである。

### 人生苦痛の價值

それに就いて現代佛國の哲人ジャン・フィノーの言にも、下記の如く味ふべきものがある、即ちそれは苦痛の價值を靜思したものに外ならぬ、其の言に曰く、





人生の苦痛に就ては、母性の苦痛即ち出産の苦痛と同じやうに考ふべき筈である、婦人はかゝる苦痛を無論つらいといつて居る、然しながら之を歡んで迎へ、嬉し涙で之を忍受する。然るに此の如く歡迎され渴望される苦痛が人生を造るのであつて人生は此の苦痛によつて更新される。

人生の苦痛も亦之に類して居る、人は之を恐れ之を避け之を呪ふも、苦痛はそれにも拘はらずやつて来る。苦痛が来ると、過去の歡樂に價値を與へること、猶ほ將來の歡樂に之を與へるが如くである。加之、幸福と歡樂は、苦痛に依てのみ生存して居る、多くは苦痛の内に生存して居る、云々。

と、之は苦痛の價値を述べたもので、一面の眞理であらう、然し苦痛も其の度を過せば、吾人の幸福を破壊することは無論である。故に氏また曰く、

苦痛といふものは、生を破壊しないときは、之を堅固にする性質のものである。然



し苦痛とても、過激に失するときは、歡樂が極端に奔る時と同じく、人生を滅却してしまふ、苦痛は毒藥と同じやうなもので、之を少量づゝ加味すれば、有機體を治する、凡ての血液の赤球を強健にする爲には、一種の血漿を之に注入するのであるが、其の分量は餘程加減しなければならぬ、餘り多量に注入すると、生命の源泉を至湧せしめないのみか、却つて之を枯渴せしむるに至る。

と、成程之に相違ない。世に所謂生の渴望者で、元氣はどこまでも激刺たる壯漢であつても、其の體質にして虚弱であり、或は何處かに缺陷があつたならば、其の人は微菌の喰入る所となつてアタラ天折せねばならぬのである。即ち苦痛を甘受することも亦適度であらねばならぬ。

然しながら吾人にして、若し眞に其の生命を愛惜し、其の天分を完うせんと思へばどうしても古人の實驗的證言の如く、「無理をせず、無謀に陥らず、卷舒伸縮其の度





を守り、其の節を持すること、恰も強弩の何時も張り詰めては却つて終に其の線を斷つ」といふ理を悟らねばならぬ、茲にも吾人平生の用意といふものゝ必要を語るのである。即ち悠揚迫らざる態度、及び度量といふものがなければならぬ所以である、益軒が「動き騒げば業をつとむるに力なく、迷ひてあやまり多し」と述べたのは、大に味ふべき要點でなければならぬ。然らざれば吾人は其の貴重なる生命をも可惜、失ふのである。

### 不安なる家庭生活の現状

所で吾人日本人としての今日の家庭生活は、如何の狀態であるかといふに、國の經濟狀態が甚だ不安なるに伴ひ、多年の不景氣が各自の家庭にも襲ひ來り、擣て、加へて、古今未曾有の大震大火を被つたのであるから、其の大影響を受けて苦痛は一層劇



甚なのである、即ち物質の上にも精神の上にも、我國民は二つながら不安不足の下に置かれ、或一部の有閑階級を除いては、多くは殆ど不眠不休の慘禍に見舞はれて居るのである。

是に於て予輩の力説して止む能はざるものは、かゝる上天の試練とも見るべき一大厄難に逢遭したる國民は、果して之が艱難苦痛を甘受し容忍し、而も堅忍持久して、一陽來復の春に逢着し得るや否やといふことである。否な之は是非ともよく之に打克ち、耐へ忍んで國運隆昌の春を迎へ、而して國力充實の秋を來さねばならぬのであつて、それが即ち戊申詔書や國民精神作興の詔書を垂示された所以であらうと拜察するのである。言ふまでもなく、今日は實に國民精神を振起すべき秋である、然したゞ漫に國民精神の振起を口にしたとて、其の行ふ所にして其の名に副はず、其の實に適はなかつたならば、到底國力の回復といひ、國運の隆昌といふ如き大事業を成し遂げ得





ざるのみならず、所謂帝都の復興さへも頗る覺束なく、而して各自の家庭とても、其の大打撃を蒙つた創痍を癒すことを得ないのを虞るゝものである。かくては何時まで経つても、冬の霜枯れ時で、一陽來復裡に春を迎へて、家族一同が春風駘蕩の下に、一家團樂して、眞に人生の快樂を享受し得ないのである。

### 今や一大緊切の時期

蓋し家族制度に依りて古來邦家を築き成して居る我國にありては、別に歐米人の發明を待つまでもなく、家族は即ち國家の根源であつて、個人の家庭が健全でなければ決して國家の隆昌を齎らすことを得ないのである。果して然らば歐米の社會に於て、前世紀以來其の弊竇に陥つた個人主義などの缺陷を助長せしむることなく、どこまでも舊來の家族主義に依つて、各自の家庭を健全幸福ならしめねばならぬ、それには言ふ



までもなく、家人一同がよく勤儉の必要を了解して、其の實行を怠ることなく、而も特に家政の運用を掌る主婦にあつて、一には其の良人を内助してよく活動せしめ、二には自ら其の家庭を富裕安樂ならしむるやうに勉むべきことである。思ふに勤儉の必要は、既に世上識者によつて唱道せられ、政府當局者によりて獎勵せられ、民間有志者皆それらに力を合せて、之が實行を期して居る、されば今更吾人の絮説を要しないが、然も勤儉の精神にして、眞に得了せられない限りは、如何に其の聲を大にしたり、其の宣傳振りを業々しくした所で、其の効果は極めて稀薄に終らねばならぬ。即ち古往今來、國力の衰へ國勢の振はざるを見ては、朝野力を盡して之が回復に努力するのであるが、それには國民精神といふものを先づ緊張せしめ、同時に其の日常生活を緊縮せしめて、孰れも其の引締りたる精神と行動との兩方面より着々實行して、始めて其の効果を奏するのである。實に今日は其の必要に迫られた





日本精神と修養  
一大緊切の時期に當つて居るのである。

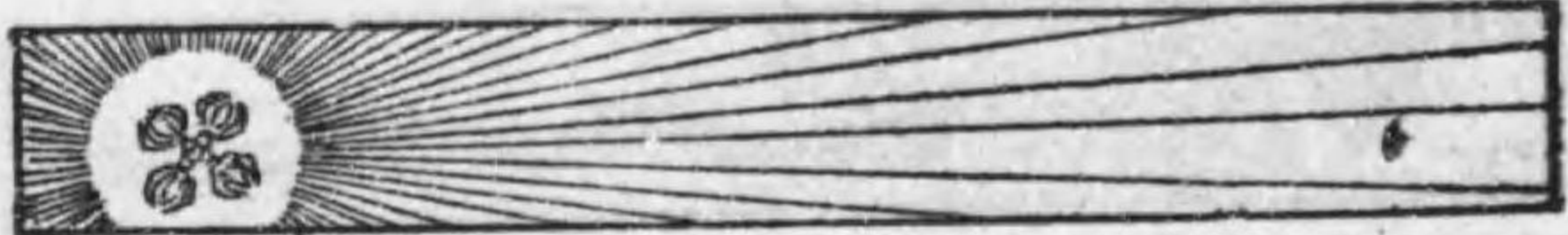
### 勤儉の精神とは何ぞや

そこで予輩が今更に繰返さんとするのは、勤儉に對する東西先哲の活教訓である、即ち勤儉なる者は、言ふまでもなく、家政と家庭の組織の上に應用せられたる秩序の精神であつて、此の秩序を守るといふことによつて、始めてよく一家の資財を儉約し而して浪費を省き無益の用途を避くるの目的を達成し得るのである、言ひ換へれば勤儉といふことも、これ亦道理と遠慮との下に成立し得るものであつて、決して偶然に實行されるものではない。乃ち此の勤儉に依りて、吾人は進んで事物の最良を、最も多く成し遂げんと努力するのであつて、必ずしも貯蓄の爲に金錢を貯蓄するのでもなく、而して他人の爲には、時に喜んで之が犠牲ともなり、又將來の善事の爲には、隨

意に其の困難にも服従するのである。されば此の秩序の精神にして一たび得了せられたならば、吾人は必ずしも外部よりの宣傳や、絶叫を待つまでもなく、各自の家庭に於てよく之を實行し得るのである。

### 國民道德の要は茲にあり

所が此の精神が、どうも徹底的に普及せられない結果は、古來其の國民は、勤儉の必要に迫られながら、漫に之を對岸の火災の如くに、雲烟過雁視して、とんと念頭に掛けぬのである、而して各自富める者も然らざる者も、皆分不相應に浪費し濫費して一時の快樂を享受せんと勉めるのである、之を稱して虚榮虚飾といふのであるが、今日は此の虚榮虚飾が、好況時代より引續いての因襲惰力として、尙ほ存在して居るのである、而して自ら困窮を招き苦痛を重ねて居る、之は我國の家庭に於て大に反省改







悛せなければならぬ所であらう。

思ふに道徳の必要といふことは、此の邊にも存じて居るのであつて、必ずしも君に忠なれ親に孝なれとのみ説き示すのが道徳の要ではない、之に就て、益軒先生は當時大に世人を教戒して、道を示されて居る。其の言に曰く、

上代より此のかた、誠は日々にをとろへ、かざりは日々にさかんなり、をこりは彌々まさり、儉約は彌々すたる、質朴をばいやしみ、華美をば愛む。今の世に道を行はど、いつはり、かざりをやめて、古風に立ちかへり、すなほにして眞實なるを尊びつとむべし。眞實なれば、人も感じて、従ひ易し、時俗にうつり行くべからず。今も昔も同じ道理で、如何にも適切なる處世上の教訓といはねばならぬ。然るに個人主義の弊や、享樂主義の弊は、遂に我が今日の社會をして、滔々として華美贅澤に陥らしめ、而して質朴をいやしみ、儉約を廢するに至らしめたのである。



思ふに我國財界の沈衰したのも、之と反對に物價の騰貴するの、而して毎年輸出貿易の減退するといふのも、之と反對に輸入超過であるといふのも、皆これ我が國民が、各自の家庭に於て、秩序の精神を確立せず、たゞ泛々漂々として一時迷れの姑息を追ひ、而も徒に利那的の享樂氣分に酔ひ、かくて浪費と濫費とを、今尚ほ續けて居るの結果と見ねばならぬのである。是に於てか大に婦人の自制をも要求する所がなくばならぬのである。

### 第三章 地震國民の用意

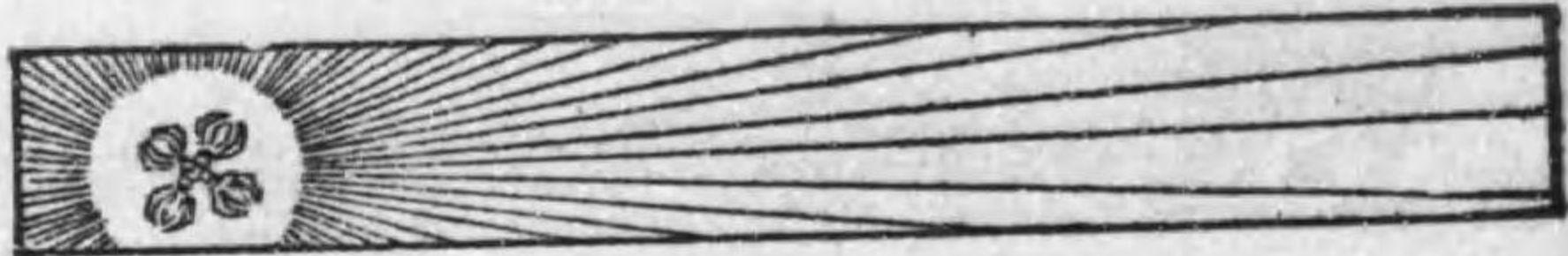
#### 地震より受くる脅威





此の程地方を巡遊して、何となく愉快に感じたのは、交通の便利の年と共に開發されて行くことであつた。而して此の感じは關西地方特に京阪神を中心としたる各地の便利となつたことに於て一層其の度を深うした。然しながら眞實の處は、たゞ交通が便利となつたといふだけで、之に對する吾人平生の用意といふものが、何等準備もしてないといふ點に於て、また聊か一驚を喫せずには措かれなかつた。

抑々文明といふものは、自然を征服することに依つて、促進され得るといふことは、豫て學者先輩に依つて聞知して居た所であるが、吾人は自然を征服するといふ如き大膽なことをして居るだけに、其の反面には、自然の壓迫や脅威を受くることの至大なるを顧慮せずには措かれないのである。現に先年の關東大震火の如きな、グン／＼自然を征服して、文化を取入れた丈に、其の脅威を多大に蒙つて、殆ど復讐的に古今未曾有の慘禍を見舞はれたのである。それは兎に角として、今日にては、何人も文明開



化の大御代であるとして、其の惠澤を喜んで居る、即ち田舎人の如きすら、野良仕事を仕舞つて、都會に近い所では、まづい夕飯でもあるまい杯といつて、汽車や電車に乗つて、電燈や瓦斯燈の光まばゆい都會の町へと、時には出張することすらある。年の若い會社勤めや、役所通ひの青年男女が、手近のカフェーやレストランに走るのは無理もない、勞働者が腹掛のドンブリを膨らまして、簡易食堂や、ハイカラの繩暖簾に贅澤を極めるのも、決して怪しむに足らぬのである。然し之は唯だ漫然と文明の惠澤に浴してゐるといふだけの事で、實は吾人は此の文明に對する平生の用意といふものを怠つて居るのではないか、それは其の文明より受くる自然の脅威や壓迫が随分著しく恐るべきものであることを忘れて居ると、想像するに十分であるからである。





危害慘禍に對する保險

そこで先づ第一に考へて見れば、吾人は手近き處に於て、文明の機關の恐ろしきを痛感する。即ち汽車、電車、自動車などの頻々起る衝突や顛覆といふ如きがそれである。畏れ多くも痛ましくも北白川宮殿下は、海外御漫遊の途次に於て、此の危害を敢なくも被らせ給ふた、引續いて伊勢詣りをして、汽車が重なり合つて、多數の死傷者を生じた、又暮れの大晦日に御丁寧にも列車の顛覆を見た事すらある、何といふ、あぢきなく淺ましいことであらう。さすれば此等危害に對するだけの用意は、吾人は平生より心掛けて置かねばならぬことであつて、それには生命保險といふものもあり、又傷害保險といふものもある。それはかゝる時の危害を保障して、眞逆の場合、十分の手當をしたり、入院をしたり、或は子孫をして後顧の憂へなからしむるといふの



であるから、吾人は平生、他の諸入費を節約しても、此の保險金だけは、之を仕拂ふやうにせねばならぬことである。之が抑々文明の代に處する、平生の最も進みたる文明的の心掛である。

さて今の世は便利だけに、其の危害も大きい、又色々とある、電燈の漏電といふことも恐ろしいものゝ一つ、水道の斷水といふことも厄介な困つた事の一つ、藥品や瓦斯に依る火災といふことも恐るべく慎むべき災厄の一つである。殊に先年の如き未曾有の震災に逢ふては、此等利便の機關は一時に其の用を爲さぬのみでなく、其の危害を他に及ぼすことも甚大で、之は最早説明を要しないほどの明瞭顯著なる事柄である。然るに世人はそれを平生には放心して氣にも留めず、又之に對する用心といふものを忽かせにして居るから、さてこそ屢々非常の災厄に逢ひ、又之に對する保險の用意をも怠つて居るから、其の損害をして全く償ふ所なからしむるのである。而して特





に先年の關東震災に於ける如き大惨事大被害も見るに至つたのである。思へば半分は自業自得の報いといつても、不可はないのである。

### 地震國たる邦人の態度

抑々財物の毀損や焼失に就いて我が地震國にては其の震災に逢ふた場合は豫め斯くくといふ契約を前以てして置く必要があつたものを、我が邦人は一體に呑氣で樂觀的であるから、通常火災より外、從來何等懸念する所なくして、終に不可抗力の天災なりといふ口實の下に、假令契約條項に明記されてあつたとはいへ、火災保險會社をして、ぬぐくと口を拭ふて對岸の火災視せしめたといふ如きは、如何にも残念至極の事でないか、現に關東にあつた後、又しても山陰地方にもあつたが、此の係争はどうしても契約者の方が負けである。畢竟皆これ我が國民が地震に對する平素の用意



を忘れる爲といへば、今更誰を尤めんやうもない。蓋し文明の代には其の時代相應に諸種の保險機關も具備してゐるのであるから、吾人は十分に之を利用するやうにすればよい、而も多くはそれをせずして無頓着なるは甚だよくない。予輩は此等の無頓着と無算當と放心の甚だしいのを、今後の青少年諸君に對して、警告せずには措かれないのを痛感する。

### 保險と貯蓄

更に考慮せらるゝことは、かゝる文明時代の危害慘害に對して、若しそれを不可抗力として諸種の機關が未だ十分に之が保險を引請けて呉れぬといふならば、吾人は一層平生の用意を周到にして、此等變災後に處する貯蓄といふことを準備して置かねばならぬのである。今日にては生命保險の中にも、死亡後遺族の受取るべきものの外に





養老保険といふものもあり、殆ど貯金に等しい積立的の保険もある。尙ほ政府によつて營まるゝ簡易保険の貯金的なものもある、又左ほどまで考へずとも、平生の用意としての郵便貯金もあり、各銀行の積立貯金もある、吾人は出来るだけ之を利用すべきことである、畢竟これ文明の惠澤を眞に程よく享受する謂に外ならぬからである。所が此等に對する平生の用意といふものを、吾人は兎角放心や浪費の爲に之を準備することをせず、而して事變起つて後、後悔臍を噛む者の多きは、全く邦人の樂觀的なる缺陷である、されば今後は成るべく注意して、或場合を豫想し、事變に遭遇しても周章狼狽する所なき精神的修養を積むと共に、文明の齋らす慘禍を甚大ならしめぬ工夫を凝し、同時に之に對する物質的の保障を平素より積立つる覺悟がなくてはならぬのである。古人が「後悔先に立たず」といひ、或俚歌に示して「後悔を先に立たせて後から見れば、杖をついたり轉んだり」の譏りを受けぬやうにせねばならぬこと

である。これ皆後來の國民たる青年諸君の最も深く留意して置かねばならぬ所である。

### 吾人の精神的生活法

果して然らば、吾人は平生如何にして文明の慘禍に對して用意すべきかといふに、それは外でもない、成るべく出来るだけ貯蓄をして後圖を爲すことであるが、それはそれ相當に平生の心掛といふものがなくてはならぬ。即ち理窟を外にして、實行上に準備をするといふことが極めて必要である、所で其れ等の準備は吾人の屢々繰返す如くに、第一には簡易生活を營んで平生成るべく餘裕を積立て、之を現金にして置くことであり、第二には日頃の執着心といふものを撤廢して、物質といふものに對して餘計な裝飾をせぬやうにすることである。而して都會などの人において、以上の心







得の外に、更に虚榮心といふものを抑制して、入らぬ奢侈贅澤を今日の生活上にせぬやうに、深く戒むべきことである。又地方の人などは、此等の點に關しては、古來概して簡易生活を營み、又執着心といふものも少く、虚榮心も至つて少いやうであるが、然し近年は大分都會の惡風に感染して、若い青年男女などにありては、我れと自らこれ等惡風に染りて、終に煩悶し苦み抜いてゐるものが多いやうである。従つて地方町村までが近頃は自然奢侈にもなり贅澤にもなり、虚榮心にも捉へらるゝ傾となつてゐるのである、之は吳々も深く戒むる所がなくてはならぬ。

無形に生き永遠に生きよ

著者は、近時地方に講演する毎に、吾人は今後十分時勢に目覺めて、而も「有形に生きずして無形に生きよ」と説き、又進んでは「現代にのみ生きずして永遠にも生き



よ」といふことを繰返して居る。有形の衣食住等に生きて、外觀を飾り、表面を装ひそれにて得々たる如きは、何等人生に取つて價値のないものである、菜根をかぢり綿服を纏ひ、茅屋の住んでも、吾人は何等恥づる所はない、却つて衣食住に奢侈贅澤をして、自ら其の心身を苦め傷めて、不幸短命に終るよりも、其方が寧ろ幸福であるかも知れないと教訓してゐる、而してかゝる淺慮な事に心思を勞することを止めて、吾人は出来るだけ、他人の爲に社會の爲に、將又國家の爲に、人として價値あり、臣民として有功なる仕事をするがよい、それは必ずしも貴賤貧富に拘はつたものでないといふことを説明してゐるのである。而して言ふまでもなく、「人は一代、名は末代」「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」と古人の道破せる如くに、つまり現代に生きずして永遠に生きることを心掛くるがよい。即ち人生五十、七十は古來稀なる短生涯に於て、徒に物質欲に捉へらるゝことなく、又一時的なる功名富貴に焦慮す





ることなく、よく人生を達観して、假令其の身は死し其の骸は朽つるとも、其の芳名遺烈をして天下後世に残存せしむるやうに、常に念頭にそれ等殊勝なる心掛を去らぬやうにすべきことなりと懲愆して居る、要するにこれぞ即ち吾人が平生に處する用意の到れるものに外ならぬのである。かの有名なる菜根譚の劈頭には何と掲げてゐるか、

道德に棲守する者は一時に寂寞たり、權勢に依阿する者は萬古に凄凉たり、達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ、寧ろ一時の寂寞を受くるも、萬古の凄凉を取ることなかれ。

と、これ實に前段に示した所を短言したものに外ならぬのである。

### 震災の回顧と其後の災厄

さて月日の經つのは矢よりも疾しといふ諺の如く、關東の大震災火災後、早くも滿二年を迎ふるに至つた。世俗の語に従へば三周年である。當時は我が國民特に罹災地の同胞は、誰も彼も生きたる心地はなく、命あつての物種と觀じ、今後は裸一貫で新規時直しをするといふ大意氣込みであつたが、それが何時しか其の熱も冷却したやうである。然るに此の滿二年間を回顧して見ると、更に驚かるゝことは、我が邦家に取つての災厄といふものが頻々として起りつゝあることである。即ち地震や出水や火災といふ如き天變地異のみならず、此等が續出する上に、更に之に劣りもせぬ社會上の凶事や否運が頻々として我が日本人の身邊に襲ひ來り、内外多事、國步艱難の實狀を呈してゐるのである。さればかの地震當時、之を一種の天譴なりと見て不可なしといつたのを、厚顔無恥なりし連中は毫も意に介せず、依然天を畏れず人を憐ますして經過した所、何事ぞや今日の財界の不振と世間の不景氣とを來し、輸入超過、爲替相







場の變動といふ惨状に際會しては、必ずや打萎れて心窃かに或は從來の放漫淫縱なりし爲の天譴ならずやと浩歎して居る向も少からずと思はるゝのである。

殊に此の間北米合衆國よりは自今以後日本人入るべからずと、移民法で叩き付けられ、引續き隣邦支那の日貨排斥、或は在外各工場の同盟罷工となりて度膽を抜かれ、終にかの二十七八年戦役や三十七八年戦役は抑も何をして居たものであつたかと疑はるゝばかりの状態を呈し、一時戰勝國なり一等國なりと自負したり、譽めそやされて自慢して居たのもホンの束の間に過ぎず、擣てゝ加へて、世界大戰の餘徳で儲けた幾十億の金を殆ど吐出して仕舞ひ、又もや元の李阿彌の債務國に逆戻りといふことゝなては、所謂踏んだり蹴たりの目に逢つたもので、それは先方が悪いと怒つて見た所で今更始まらぬ仕儀、あせればあせるほどボロを出すの道理、此の際は唯だ臥薪嘗膽して陰忍自重し、チツと國力を充實して他日の捲土重來を待つより外はないことゝなつ



た。何と情けなく哀れな現状といふべきではないか。然しそれも之も皆多くの調子に乗つて、自省し自警することを忘れて居た結果なりと諦むるより外はない。

### 依然たる國民の奢侈心

思ふに我が國民が從來より奢侈に耽つてゐるといふことは、全く自制といふことの必要を解せず、唯だ時勢の向ふ所に乗じて事業を手廣く營み、それに依つて得たる利益なりとて、之を己が衣食住や娯樂等の満足にのみ消費するを以て當然なりとし、毫も國民としての立場も考へず、隣人や郷黨に對する遠慮も影響も考へず、反つて之を得々とする不心得に出發してゐるのである。これ等は戦後の歐米人が着々として眞劍味の節約を實行して居ることを知らせるより外、彼等を反省せしむる道はない。

蓋し此等奢侈心の彌蔓せる爲にや、東京や大阪や神戸といふ如き都會にては、兎角





貴金屬や寶玉や、眞珠やルビーや、金剛石や、有らゆる贅澤品を身邊に光彩づけ、それにて紳士淑女なりと濟して居る者の少からぬことは、曩に朝日や毎日の如き大新聞に、其等の記事が満載せられたのでも判る、而もそれ等の記事が統計的に説明せられて、彼等贅澤者の反省を促がさんとしたやうであるが、目的は全く矢壺を外れて、反つて悪い事を教へる如き結果を來し、終には及びもせぬ者までが、彼等を真似て、メツキや贗造でも厭はぬといふ風に、之を頭や腕や指頭に付けねば、一世の恥辱と心得一般輕薄男女をして滔々として虚榮の波に漂はせて居るのである、何と情けない現象ではないか、今日政府にて奢侈品の關稅を倍加し、内國品でも必要品と奢侈品とを區別する法令を下すに至つたのは、實に據なき次第といはねばならぬ。

### 文明國の悪いお仲間入



此の奢侈心の増長といふものは、無論歐米諸國にも古來繰返さるゝ所であつて、特に前世紀あたり英國にては、所謂「貴族らしく見て貰ひたい」といふ虚榮心が國民一般に彌蔓し、其の弊風が終に婦人社會に甚だしき波を揚げ、上流社會にては之を當世流の社交とまで稱して、天晴れ外見を張り、それにて妾は富豪らしく見えるでせうと濟まし、社會も亦成程彼女は立派でないと歓迎したものといふ。然し元々輕佻浮薄の上に成立つて居る歡迎であるから、一朝世に時めける貴婦人でも、不運に逢ふて倒産し、止むなく勤儉に立返りて眞面目となれば、早くも其人は社交界から葬られて無資格者となつたのである。而して此の弊風が終に下層社會へと浸潤して、番頭手代小商人の女房までが贅澤を眞似するに至り、外見を張り體面を飾りて、收入以上の生活をして爲し、終に借金に淵に沈んで行く、而して一朝亭主の没落や死亡の爲に、其の妻子は忽ち路頭に彷徨するといふ慘狀を呈した、然しそれでも天下滔々として奢侈の弊





日本精神と修養 一九二

風は止まなかつたといふ。我國も文明國のお仲間入りをしただけに、主として大都會より小都會に至るまでの繁華の巷には、漸次かゝる不心得者の跋扈を見るに至つて居る。誠に名譽の至りであるが、實は芳しからぬ名譽である。

### 病既に膏肓に入る

顧みれば我國未曾有の震災當時、多くの人は何といつた、これからは多くの衣裳や多くの裝飾品は何にも入らぬ、反つて事變に際しての足手纏ひである、裸一貫ほど氣樂なものはない、火にも焼けず水にも失はず震災にも毀れず盜賊にも見舞はれないのが、物持たぬ身である。さらば大に勤儉の昔に立返らうと、誠に殊勝な志を起したのである。所が其の後の二年間はどうかであつたか、帝都は未だ復興の緒にさへ就かず僅かにバラツクに雨露を凌ぐ身なるにも拘はらず、奢侈贅澤の方は疾くも昔に復興し



て、若き男女や中流下流までも、相率ゐて舊に倍せる外見家となり、又しても一時の虚榮虚飾を事とし、不相應の奢侈贅澤を盡すやうになつたから、さてこそ政府をして先づ奢侈品の關稅を十割増とし、且つ内地贅澤品にも加稅せしむるに至つたのである之が果して明治維新以來、國民教育の完全に行はれたる文明日本國民の態度であらうか、之が又立派に高等女學校や専門學校を卒業した紳士淑女達の所爲といつてよいであらうか、かの生活改善會の宣傳ビラ時きに、寶石入りの指輪をさした貴婦人が、自動車に召して公園に至り、それより女中と共に「奢侈品を控へませう」、「消費を節約ませう」と仰つしやつたといふ大阪邊の笑話ソツクリの現状では、どうして「奢侈の病の、既に深く日本人の膏肓に喰入つて居るものといはねばならぬ、之ぞ實に我が國民上下の猛省すべき要點である。